

大菩薩峠「駒井能登守の巻」中里介山

一

甲府の神尾主膳の邸へ来客があつて或る夜の話、

「神尾殿、江戸からお客が見えるそうだがまだ到着しませぬか」

「女連のことだから、まだ四五日はかかるだろう」

「なにしろ有名な難路でござるから、上野原あたりまで迎えの者をやってはいかがでござるな」

「それには及ぶまい、関所の方へ会釈のあるように話をしておいたから、まあ道中の心配はあるまいと思う」

「関所の役人が心得ていることなら大丈夫であろうが、貴殿御自身に迎えに行く心があつたら、近いところまで行ってごらんになるもよろしかろうと思う」

「しからば、勝沼あたりまで行ってみようか知らん」

「勝沼までと言わず、いっそ笹子を越えて猿橋あたりまで行ってみてはいかがでござるな」

「笹子を越えるのはチト億劫だが、しかしまだ天目山の古戦場を初め、あの辺には見ておきたいと思つてその機会を得ない名所がいくらもある、そう言われるとこの際、行つて見たいような氣持がする」

「行つて見給え、江戸からのお客というのを途中で迎えて、それを案内してあの辺の名所を見物し、その歸りに塩山の湯にでも浸つてみるも一興であろう」

「左様、それではひとつ、氣休めをして来ようかな」
「それがよからう」

と語り合っている一人は神尾主膳で、一人は分部という組頭。この二人が別懇の間柄であることはこの会話でも知れます。この話をしているところへ、

「お客様、山口四郎右衛門様がおいでになりました」

「ナニ、山口殿が見えたと？ それはちょうどよい、分部殿もおらるる、直ぐにこれへお通し申すがよい」

「畏まりました」

まもなく山口四郎右衛門というのが入つて来ました。

「やあ、分部殿もおいでか。大分寒くなりましたな、山国である故、寒さの来ることも早いのはぜひもないが、それにしてもまだこんなはずはあるまい」

「左様、八ヶ岳にも雪が深いし、地藏岳も大分被りはじめたようだから、それが風のかげんで甲府の空を冷たくするのであらう、なかなか寒い」

「まあ、ここへ来て温まり給え、寒さ凌ぎに一献参らせ」

「催促をしたようで恐れ入るな」

「拙者ひとりで寒さ凌ぎをやろうと思つていたところ、折よく分部殿がお見え、それにまた貴殿のおいでで甚だ嬉しい、ゆっくりと寛いで行つてくれ給え」

三人は飲んでようやく興が加わる時分に、山口四郎右衛門が何をか不平面に、

「御両所、近いうちに新しい勤番支配が来ることをお聞きなされたか、その風聞がたぶん御両所の耳にも入った

ことと存ずる」

「ナニ、支配が来ると？　しからば今まで欠けていた勤番支配の穴が埋まるのか、それは初耳じゃ、我々はトンと左様な噂は聞かぬ。して、いかなる人がどこから来るのじゃ」

神尾と分部とは、自分たちの上に立つべき勤番支配の一人が新しく任命されて来るといふ報告を、山口の口から耳新しく聞いて意外に感じました。単に意外に感ずるばかりではなく、不安と妬心とがきらめいて見えるのです。

「左様か、まだ御両所にはそのことをお聞き召されなんだか。しからばお話し申そう、このたびお役目を承つて我々共の支配に来るのは、表二番町の駒井じゃ」

「ナニ駒井？　二番町の駒井能登が来るのか、あの駒井が」

神尾主膳は他人事でないような思い入れで、いそがわしくまばたきをしました。

「いかにその駒井能登守」

「左様か、駒井が来るのか」

神尾は絶望して、取って投げるような返答ぶりでした。

「太田筑前殿は老巧者だ、我等が上にいただいても敢て不足はないが、駒井は何者だ、あれは我々よりズツト年下、しかも知行高も格式も以前は我々に劣ること数等、若い時は眼中に置かなかったものじゃ。今となってあれに先を越されて剩え、我々が支配として頭に頂かねばならぬとは情けない。ああ、そう聞いては酒がうまくな

い、世の中が面白くないわい」

「それは我々も同じこと。なるほど、駒井は学問は多少あるにはあるだろう、我々が道楽をして遊んでいた時分に、あいつは青い面をして書物と首っ引きをしていたのだから、相当に理窟は言えるようになったろうけれど、それよりもあいつの得手は上役に取入ることだ、老中あたりに縁があつて、胡麻をすったその恩賞で引上げられたのだ、あいつは頼もしそうな面をして老中あたりの頑固連を口説き落すには妙を得ている」

「駒井も駒井だが老中も老中だ、いったい我々甲府勤番を何と心得ている。なるほどいづれも相当にしたい三昧をし尽した報いで、こんな狭い天地に逼塞はしているけれど、以前を言えば駒井の上に出でるものはいくらもある。言わば甲府勤番は苦労人の集まり、粹人の巢と云うべきだ、容易な人間でその支配が勤まると思われるのが大不足だ、相当の人を遣わすのが、我々へ対しての礼じや。しかるに駒井如き若年者をよこして我々の頭に置こうなぞとは、見縊られたもまた甚だしい哉。二百余名の甲府勤番がそれで納まるか知らん、駒井を頭にいただいて唯々諾々とその後塵を拝して納まっているか知らん。もしそれで納まっているようなら世は末だ、徳川の天下もいよいよ望みなしじや」

「その通り、我々が不平なるが如く、二百余名の勤番、誰とて駒井を快く思うものはあるまい。さりとて公儀からのお役目、それを反くというわけにもいくまい。いよいよ駒井が来たら我々共の覚悟はどうじゃ、いかなる思

案を以て駒井を迎えるか、あらかじめ腹をきめておかねばなるまい」

「拙者は病氣所労と披露して当分は引籠る」

「病氣所労もよからうけれど、いつまでもそうは言っておられぬ。もっと男らしい手段はないか、甲府勤番の反の強さを見せつけて、駒井の胆を奪うてやるような仕事はないか、駒井が着く早々縮み上って尾を捲いて向うから逃げ出すような謀があらば、これ以て甚だ痛快なる儀じゃ」

「なるほど」

「機先を制して駒井能登を圧倒するのじゃ、そうして、甲府勤番には骨があつて、彼等如き若年者で支配などとは以てのほかというところを、老中にまでも思い知らせてやるのじゃ、それをせねば後来のためにもならぬ」

「なるほど」

ここに三人の不平が火を發するほどに強くカチ合つて、そうして彼等の上に来るべき、年の若い新しい支配というのを呪い尽すの相談が持ち上つてしまいました。

甲府の勤番支配は三千石高の芙蓉間詰であります。その下には与力が十名と同心が五十人ずつあつて、五百石以下の勤番が二百人は甲府の地に居住しています。支配は二人であることもあり一人は欠員のままであることもあります。御役知は千石で、本邸は江戸にあって住居は甲府へ置く。

駒井能登守が勤番支配に任命されたのどういう意味だかよく判りません。或る者はこれを榮転だとして嫉み

ます、或る者は左遷だとして悲しみます。とにかくも能登守がまだ三十に足らぬ若年者であつてこの地位に置かれたことは、ドチラにしてもその人物の非凡である証拠にはなりません。

その頃の幕議に長州出兵論というのがある。薩州と長州との横着があまりといえば目に余る、どうしてもまず長州から征伐してかからねば、幕府の威信が地に落つるというのが、長州出兵論の根拠であります。この長州出兵論を唱える者の中には、徳川譜代恩顧の者で徳川にとっては無二の精忠者があります。これらの人は本心から薩長あたりの暴慢をにくんで、徳川のために死のうという連中でありました。またそれらの熱心な長州出兵論を鼻の先でセセラ笑っている者もありました。これは徳川とはあまり縁の薄い方の平民側の中の蔭口に多いのです。その言い草を聞けば、

「ナーンだ、長州出兵なんて、よけいなことだ。お膝元を見るがいい、貧窮組がああして騒ぎ廻っているじゃないか。貧窮組がああして騒ぎ廻っている間に、頼まれもない長州くんだりまで兵隊を出してどうする気だ。そんなことをするよりは印旛沼の掘割りでもした方がよっぽど割がいいぜ」

こんなことを言つて、ばかばかしがっている者もあります。

また一方には譜代以外の者で、盛んに長州出兵に声援を与える者もありました。これはずいぶん変り者で、もとより徳川のために死のうというほどの縁故もなければ

熱心もないのだが、何か景氣をつけて自分たちの仕事をこしらえたいという浪人者、或いは自称志士の連中が多かったということであります。口先ばかりでもなんでも景氣のいいことは雷同し易いから、精忠無二の長州出兵論よりも、景氣のよい人たちの唱える出兵論が、だいぶ徳川に受けがよくなりました。まかり間違ってもそれに異議を唱えるような口ぶりをしようものなら、徳川に対して反逆者でもあるかのように見られたり、薩長の犬であるかのように疑ぐられたりしますから、出兵、出兵、出兵に限るといようなことに傾いて行きました。なんでもドシドシ兵を繰り出して長州から薩摩の果て、琉球までも踏みつぶしてやらねばならぬと意気込みを示した者も大分あったようです。

この出兵論が正しいか正しくないかは知れないが、いよいよ事実になってみると愚劣を極めたものでした。最初の長州征伐は、どうにかこうにかお茶を濁して幕府の面目をつないでけれども、二度目となつてはカラキリお話になりませんでした。幕府の威信を張るところではなく、かえってグニャグニャと腰が砕けて、長州からあべこべに寄り出されて引込みがつかなくなつてしまいました。長州征伐をやっても、やらなくても、もうたいてい幕府の寿命はきまつていたのだから、それがいいでもなし悪いでもないけれど、とにかく長州征伐をやったために、徳川幕府の寿命がまだ十年持つところを、九年早めてしまったような形勢は争うべからざるものであります。

勝海舟かつかいしゅうのような目先の見えたものが——そういう場合に出て来たからおたがいに幸いでありました。けれどもその勝さんすら、いよいよ長州征伐が手に負えなくなった時に引っぱり出されたので、それまで引籠りを仰せつけられて幕府から勘当を受けていたような有様でありました。

駒井能登守はこんな時節に、甲州の山の中へ来るようにさせられたということも何かの廻り合せでありましよう。

駒井能登守が甲府へ入ることを悲しむ連中は、こんなことを言います、

「あれは山の中へ送るべき人間ではない、海の外へ向わせなければならぬ人物だ、外国との折衝せつしょうがこれほど面倒になつてゆく世の中に、あの人物を山の中に送り込む当局者の氣が知れない、駒井を甲州へやるのは舟を山へ送るのと同じで、しかもその舟も、旧来の伝馬船てんませんや荷足にたりではなく、新式の舶来の蒸氣船だ、蒸氣船を山へ積み込むとは、なるほどこのごろの徳川幕府のやりそんなことだ」

これは駒井びい最良さいきの方の言い分で、駒井が西洋の知識に暗からず、且つ外交官として相応ふさわしい器量のすべてを持つているように信じている者の口から出しました。

それと反対の方の言い分はこんなものであります、「あれは若い者共には人氣は相当にあるけれど、本人はただ西洋の知識を多少心得ているというだけのこと、実務にかけてはいいかげんの無能者で、時々調子はず

れたところで思い切ったことをするから、危なくて仕方がない、腫物に触るようなこのごろの外国向きのことに、あんな青二才を使えるものではない、甲州の山の中へ入って、摺れからしの勤番の中で揉まれて来るのが身のためだ」

これは駒井を多少けむたがっている老成者の間から出る評判でありました。とにかく未知数の人間だけれども、どのみち、まだまだ叩き上げなければものにならないという嫉悪と輕侮とそれから、幾分か敬畏の念も入っているのであります。

そうかと思うとまたこんな一説もあります。幕府は駒井の人物を見抜いてワザと甲府へ納めるのだ、甲府は天険であって、まんいち徳川幕府がグラつき出す時は、そこが唯一の根城となる、まんいちの場合をおもんばかって、駒井を遣わして地利や兵備を調べさせておくのだと。これもまた駒井鼂眞の者の臆想でありました。

またその他の一説は、駒井能登守が甲州入りをするようになったのは、高島四郎太夫に關係することである、駒井は早く四郎太夫に就いて洋式の砲術を研究したり、西洋の事情を調べたりしたから、高島と同じような嫌疑でこの左遷を蒙ったのだと。これも駒井崇拜の若い人々の口から洩れて来るのであります。

高島四郎太夫（秋帆）が幕府から怖れられたのは、他の勤王家の連中が幕府から怖れられたのとは全く違います。秋帆には大藩を動かして権力を争ってみようとか、砲術を研究してそれによって虚名を博そうとか、そんな

野心は少しもなかったものであります。国内のことに空しく慷慨悲憤している連中などの、梯子をかけても及ばないところにその着眼と規模とがあつて、長崎の微々たる小吏でありながら、諸侯の力を借りずに独力でもって大事を行うほどの実力を持っていたから、それで怖れられたのです。けれどもその秋帆とても、もう罪（？）を赦されて、江川太郎左衛門を助けていろいろ熱心にその研究をつづけている時分のことであつたから、なにもいましてその祟りが駒井能登守へ報つて来るといふ理由はないことなのであります。

とにかくにも、こんな風評の間に送られて、行先ではまた神尾あたりの、あんな悪感情に迎えられて甲府へ乗り込む若い支配の前途も多事でないことはありません。

その行列は存外手輕で、僅かに与力同心と小者の類と同勢十人足らずで、甲州街道を上って行きました。

甲府の城内へも、いつ出かけていつ到着するという沙汰なしに出かけましたから、出迎えの来るべき模様もありません。

駒井能登守は若くてそうして美男でありました。大森か川崎あたりまで遠乗りをするくらいの心持で、陣笠をかぶり馬乗袴を穿いて、十人足らずの一行と共に駒木野の関所へかかって来ました。

関所の役人も実は驚いたくらいで、今ごろ不意に勤番支配がおいでになろうとは思いませんでしたから、多少狼狽してこれを迎えました。能登守はその関所へ暫らく

休息して、関所役人から附近のはなしなどを聞いていました。

その時ちょうど駕籠かごで乗りつけて来た一人の女が、駕籠から出て関所の前へ通りかかりました。

「これこれ、其方そのほうはどこへ行く」

関所役人が呼び止めますと、その女は、

「甲府の方へ参ります、どうかお通し下さいまし」

「手形を持っておるか」

「はい、持って参りました」

女は鼻紙袋を出してその中から、一枚の厚い御手判紙おてはんがみの畳んだのを役人の前に捧げますと、

「ええ、其方そのほうは女軽業の芸人を引連れ……かくと申す女であるな」

「左様でござりまする」

「このお手形には二十余人の一座と書いてあるが、その者共はどこにいる」

「それはあとから参りまする」

「待て待て、このお手形の日附が違う、エーと、其方は今より三月ほど前にこの関所を越えて甲府へ出たことがあるように覚えていますが、これはその時の手形だな」

「ええ、その……」

「ならん、斯様かようなものは用向の済み次第お上へ御返納申さねばならん、これを以てお関所を通ることは相成らん」

「では、そのお手形では通れないでございますか」

「左様」

「それではお書換えを願いたいものでございます、急に

甲府まで参らねばならないでございますから」

「ばかなことを言うな、そう急に書換えなどができるものではない、江戸表へ立帰って相当の手續を踏んでお願い申せ」

「そんなことをしてはおられません、わたしの連合つれあいが甲府にいて、急にわずらいついて、大へん危ないのでございませうから、どうぞ、お通しなすって下さいまし、お手形は古うございませうけれど、この通り少しも怪しいものではございませぬ」

「怪しい者であろうともなかりうとも、拙者はお関所を預かる役目、手形のない者は通すことならぬ」

「それではわたしが困ってしまいます、もし連合いにも亡くなられてしまったら、わたしは死目しにめに会えないじやございませうか、助けると思ってお通し下さいまし」「わからぬことを申すな、其方そのほうの事情がどうあらうとも、お上の御法を曲げるわけには相成らぬ」

「それでもせっかくお江戸からここまで来たものが、どうしてまたお江戸へ帰られましょう、ほんとにこうしてある間も気がせくんでございますから、お通しなすって下さいまし、女一人ぐらい通して下すったっていいじやありませんか、お目こぼしということもあるじやございませうか、どうぞお頼み申しますよ」

この女は女軽業の頭かしらのお角でありました。お角は一生懸命に役人に頼み込んでみましたが、許さるべくもありません。

「くだい！ この上かれこれ申すと処分致すぞ」

役人は言葉を荒くして叱りつけます。

「おや、これほどにお願い申すのに判らないお役人だ」と

「何を申す」

お角があまり強情だから、役人は立って抓つまみ出そうとしました。

縁に腰をかけて見ていた駒井能登守が、

「これこれ松浦」

用人を呼びました。

「はい」

「あの女、血迷うているようじゃ、其方が行ってもと来た方へ追い返してやれ」

と言って、能登守は扇を持って指図をしました。能登守が元の方へ追い返してやれと扇で差し示した方向は、女がもと来た江戸の方ではなく、これから行こうという甲府の方でありました。

松浦はそれを心得たようにズカズカと女の傍へ来て、「これ女、お関所の前で左様なことを申してはならぬ、早く立帰って出直して参るがよい」

と言って、女の手を取ってグングンと引張り出しました。

「これほどにお願い申してお聞き入れがなければそれまででございます、もし連合いが甲府で亡くなるようなことになれば、わたしは江戸へ帰って親類の者やなにかに面かおが会わされませんから、ここで死んでしまいます、お関所の前で死んでしまいます」

「さてさて女という者は聞入れのないものじゃ、死にた

くば他へ行って勝手に死ね、お関所を汚けがすことは相成らぬ」

無理無体に引張り出されたから、女の力で争うことはできません。

「ほんとに口惜しい、わからないお役人だ、わからずや」

お角は引摺ひきずり出されてしまいましたけれど、その引摺り出されたところは意外にも甲州口でありました。

「愚おろかも者め」

ポンと関所の外へ突き放されて腰が砕け、暫らく起き上れないでいたが、起き上った時分に気がついてお角は喜びました。

「ああ、わかった、あの若い殿様が粹すいを利かして下すつたのだ、もと来た方へと言って、ワザとわたしを甲州口の方へ突き放すように、御家来の方に指図をなされたものを知らずにお怨うらみ申したわたしは、やっぱり女だから馬鹿だね。殿様、有難う存じます、あとでお礼を申し上げます」

お角は起き上ってお関所の方へ向いてお礼を言いました。

それから大急ぎで甲州の方へ歩いて行きました。

がんにりきに出し抜かれてしまったお角は、こうして前後の考えもなくそのあとを追いかけて来ました。お角にとっては、がんにりきがそれほどに可愛ゆいわけではなく、お絹という女が憎らしくてたまらないのです。あんな古証文を突きつけて人をばかにした上に、またがんにりきと一緒にになってこれ見よがしの振舞でもされた日には、意

地も我慢もあったものではないのですから、お角はあとを追っかけて来しました。

腕こそ一本落したけれど、足の方に變りのないがんりきの歩きぶりは、到底お角の足を以て如何ともすることはできません。ましてがんりきの方は変則な道を通り、裏道を行くのは慣れているから、お角が追いかけてみたところで到底ものにはならないけれども、どのみち行く道筋は甲州街道で、落着くところは甲府、先へ行ったのは女連、途中どこかで追いつかなければ、甲府で落ち合う。その時は、がんりきとあの後家様をつかまえて、思う存分荒れてやろうと、例の如く懷中には剃刀なんぞを忍ばせて、駕籠を飛ばせて来たわけです。

幸いにうまくお関所が抜けられたけれど、これから先がほんとうの難所、女一人で通れるはずの道とも思われません。

お角が一人で小仏の方へ行ってしまうてから、駒井能登守の一行がこの関所を立て同じ方向に出かけました。

関所で駕籠乗物の用意をするというのを謝絶って、やはり馬で行きました。険岨な道へかかったら馬から下りて歩くと行って行きました。

小仏の宿から峠まで二十六丁。

「しかしあの女は愚かな女じゃ、駒木野を越えたからとて、まだこの先に上野原の関所もあれば、駒飼の関所もある、関所よりもなお難渋な、小仏峠というものもある、これは知るか知らずか、

女一人で甲府まで乗り込もうというのは、大胆と言おうか、愚かと言おうか」

これを話のはじめに、与力同心のなかでいろいろの話が持ち上りました。

「いや、あれは真実、亭主の病気を思うて出かけて来たのかどうかかわらんが、とにかく何か思い込んで来たような女である、あんなのが何か思い込むと大胆なことをするものじゃ」

「左様、女軽業の元締とか言いおったが、彫物の一つもありそうな女じゃ、しかし悪党ではないらしい」

「悪党ではあるまいが、悪党に変化しそうな女である、あれが悪党になると鬼神のお松といった形で、この峠の上などに住みたがる」

「いや、そういうことはあるまい、あんなのはまかり間違つて亭主を剃刀で切るとか、胸倉を掴んでギユと締めるといった程度で、それ以上のだいそれたことはできない。むしろ平常は内気でおとなしく、口も碌に利かないような女が、時とすると大胆なことをする」

「それはどっちとも言い兼ねる、女はハズミ一つであるから、そのハズミの具合によつていかなることをやり出すかあらかじめ断わりはできない、女そのものの性質というよりも、時のハズミが女を賢婦人にしたり毒婦にしたりする例が多い」

「それも一理はあるようじゃ。しかしそれではハズミというものをあまり重く見過ぎたきらいがある、いかにハズミが附いたからとて、政岡が、鬼神のお松になること

はなからう」

「性質にもよりハズミにもよる、罪はその両方にあると見るのが穩当であろう。明智光秀あけちみつひでの如きも、信長公があれほどの短氣でなかったならば、謀叛むはんはしなかったであろうが、たとえ信長公が短氣であったところで、光秀そのものに謀叛氣がなければ、あんなことにはならぬ」

「要するに鐘と撞木しゅもくの間が鳴るところで、我々共の役目においてもその通り、強く罪人を扱うてかえって罪を大きくしてやることになり、或いは寛ゆるやかに扱い過ぎてかえって増長を来すようなこともある」

「寛嚴よろしきを得たりということは治政の要術で、その術はまた治者の人格である、くだらぬ人格の者が、みだりに寛嚴の術を弄ろうすればかえって人の輕侮を招く」

「大阪の与力大塩平八郎の事件などがそれじゃ、あれは跡部山城守あとべやましろのかみどの殿が大塩を見るの明めいがないから起ったことである。奉行が大きければ大塩は非常な用をする、奉行が小さくて大塩が大きかった故あんなことになったという説がある」

「大塩はとにかく近代での人物である、是非善悪は論ぜず、貧民のためにあれほどのことを為し得る奴はほかにあるまいと思われる、あの乱もまた大塩自身の人物もあろうけれど、時のハズミというものもなきにあらず」

「国民の富豪に対する怨恨うらみがようやくに熟していたから火蓋ひぶたが切られたのじゃ。それにつけても思うのは、このごろ江戸に起った貧窮組、浅ましいようでもあるし、おかしいようでもあるが、あれもまた時世を警いむる一つ

の徴候しるし」

駒井能登守の一行は、時事を論じたり、風景を語ったりしながら、小仏峠の頂上まで登ってしまいました。

頂上に中の茶屋があつて、そこに休んで見ると赤飯せきはんがありました。その赤飯を大盤振舞おおばんふるまいにして与力同心、仲間馬方に至るまで食いました。能登守もまたそれを抓つかんで喜んで食いました。なおお茶を飲む者もあれば水を飲む者もあります。頂上まで上つて見ればこれからは下りであります。下り道は上り道よりも楽であります。上野原泊りの予定は、遊びながらも着くことができるのであります。

能登守は柄に似合わない健脚でした。いちばん早く参るだろうと思われた能登守がいちばん疲れないで歩いて来ましたから、

「御支配は健脚だ、いや身体の華奢きゃしゃなものはそれだけ足の負担が軽いからそれで疲れないので、我々は頑健肥満に生れた罰でかえって山路に難渋する」

と言って、与力のなかで、いちばん肥満していちばんよく話をした男が、いちばん早く疲れて愚痴を言いました。

「おのおの方は、あまりよく口を利きなさるからそれで疲れるのだらう、すべて険岨けんそを通る時や遠路とゑみちをする時は、あまり口を利かない方がよいそうじゃ」

能登守はこう言った。なるほど、いちばん疲れない能登守がいちばん喋しゃべらなかつた。

「無言で氣息を調ととのえて歩けばよろしからうけれど、そこが旅は道づれで、いろいろの話をして歩きたいのが凡

夫の常だ。よしよし、今度は無言の行を続ける」

とにかく、中の茶屋で休んで、赤飯などを嚙かじっている
と、誰も彼も疲れなんどは一時に忘れてしまいました。
その元気で茶屋を立て下りにかかりましたが、上りに
懲こりて無言の行を続けると言った肥満の与力は、洪じゅう面めん
を作つて口を噤つぐんで歩きましたが、それにひきかえて能
登守が今度はいろいろの話をやり出しました。街道筋の
地勢や要害を指さしながら、土地案内の与力同心に聞い
てみたり、自分の意見を述べてみたりしました。時々
諧かい謔ぎやくを弄もして一行を笑わせたりしました。それで話の
花が咲いて、登りの時より一層賑やかになりました。強し
いて口を噤つんでいた与力の連中もまた談話中の人となつ
て、疲れた足を引きずりながら、息をはずませて気焰を
上げていました。

山腹の左の方から溪水たにみずが湧き出て滝のように流れてい
ます。それが深い谷に落ちて淵ふちになったり、また岩に激
して流れ出したりする変化が面白い。その溪水を幾十曲
りもして見ると、向うに二軒の茅屋あばらやが見える。その前に
板橋があつて、溪水がそこへ来て逆に流れている景色が
なかなか面白いから、一行はそこで暫らく立って景色を
見ていました。すると駒井能登守が、

「あれ見よ、あの家の後ろを怪しげな男が通るわ」

と言いました。一同は谷川の景色ばかり見ていたのだし
たが、能登守にこう言われて、前の山の二軒の茅屋のと
ころに眼をうつすと、そこを一人の旅人が急速力で、サ
ツサと歩いて行くのを認めます。菅笠すががさを被かつて道中差どうちゅうざし

を差して、足ごしらえをしてキリリとした扮装いでたちで、向う
岸の茅屋の後ろを飛ぶが如くに歩いて行きます。

「あれは何者だ、足の早い奴」

と驚いていると、能登守が、

「いかにも怪しげな奴じゃ、関所の裏を通つたものと見
ゆる、誰ぞ行つて追蒐おいかけてみられよ」

「心得ました」

同心が二人、板橋を渡つて向う岸へと飛んで行しまし
た。

怪しげな旅の男はそれを知つて、山の中へ逃げ込んで、
かいくれ姿を隠したから、追いかけて行つた同心は空し
く歸つて来ました。

「怪しい奴、足の速はやいこと無類でござりまする」

同心はまず以て、その逃げ去つた奴の足の速いのに舌
を捲いて復命しました。

「年はまだ若いようであつたな」

「年はまだ若いようでございました、三十の上を幾つか
越したくらい、遊び人風の男で、後ろ姿をチラリと見か
けましたが、その速いこと速いこと」

「なんにしても怪しい奴じゃ、すべてあの通り足の速い
奴には悪いことをする者が多い、よく演劇や講談に現わ
れる雲霧くもきり仁左衛門にざえもんという悪漢も足の速い男であつたそう
じゃ」

「ああ、その雲霧仁左衛門という悪漢、それはこの上野
原から出た奴にございます、この上野原のしかるべき家
に生れた悪漢でございました」

「足が速いと高飛びが自由にできる、それで今日ここで悪事をして、明日は他国へ行って知らぬ面^{かお}している、悪事千里を走るとはこのことじゃ」

「足が速いから自然、手が長くなるのでございましょう。冗談はさて置き、あの怪しい奴、取逃がしたは残念、直ちに手配を致して取押えさせましょう」

「それには及ばぬ」

「せっかく御支配のお目に留まったものを取逃がして、面目がござりませぬ」

「向うの岸とこっちでは無理もないことじゃ、まして人間並みを外^{はず}れた足の速い奴、逃げるのがあたりまえで、逃がした方に罪はない」

「それと知ったら声をかけずに、何か手段があつたろうものを」

「これから先のこと、甲府へ入るまでにきつと、あの者が再び現われることがあるに違いない、その時は油断せぬように」

「心得ました」

与力同心の面々がみな多少の好奇心にそそられまして。もとよりこれらの人々がワザワザ手配をして騒ぎ立てるほどの代物^{しろもの}ではないが、道中の腕比^{うでくら}べというようなことになってみると、多少の張合いが出て来るものでありまして。それ故、無駄なことと思つたもののまでが、休み茶屋や、泊り泊りにも用心をしてみる気になりました。しかしながら別段に変わったこともなく与瀬^{よせ}の宿^{しゆく}へ入つて、これこれの者の姿を見かけなかったかと尋ねてみて

も、誰もそんな者を見かけたという者はなく、
「ただ、さきほど峠道で若いおかみさんが悪者に苛^{いじ}められていたところを、鳥沢の親分が通りかかって連れておいでになったばかりでございます」と土地の人が言います。

「若いおかみさんが悪者に苛められているところを、鳥沢の親分が助けて連れてかえったと？　してその若いおかみさんというのは……また鳥沢の親分というのは何者」

与力同心が、土地の者の言葉尻^{しつ}を捉^{とら}えてそれを訊^{たず}ねてみました。

よく聞いてみると、峠道で悪い胡麻^{ごま}の蠅^{はえ}にかかつて苦しめられていたという女は、駒木野の関を通してもらった女であつて、それを助けた鳥沢の親分というのは、鳥沢の糸^{くめ}という親分であることがわかりました。

鳥沢の糸^{くめ}というのは郡内^{ぐんない}切つての親分であつて、ずいぶん悪辣^{あくらつ}なことをするし、また相応に義侠らしいこともする。この界限^{かいがい}では厄介者視^{いふく}しているものが半分と、畏服^{いふく}しているものが半分という勢力であることもすぐにわかりました。

それを聞いただけで、駒井能登守の一行は例の通り上野原までやって来ました。上野原の宿へ着いた時も、先触^{さきふれ}がなかったから役員どもを驚かしました。

御支配のお着きということは本陣を大へんに騒がせたけれども、そのほかには至って無事で、一泊して翌日未明に出立。

上野原を出て少しばかり坂を下ると、もうすぐに川であります。川の兩岸には川越しの小屋が立っていて、真裸まっぱだかになった川越し人足が六七人ほど、散らばっているのが一目に見えました。

「これが鶴川の渡し場でございます」

「なるほど、先年諏訪すわい因幡いなば守殿のかみどのが人足どもに困らせられたという渡しはこれか」

「あれ以来、人足どもも大分おとなしくなりましたが、やっぱり気の荒い郡内の溢あふれ者ものでござるから、おりおり旅人が難儀する由でござりまする」

「ゆくゆくはなんとか取締りをしたいものじゃ、どこへ行っても、この裸虫には弱らせられる」

一行は川越しの小屋のところまで来ると、宿役人から先に出向いいていて、しきりに人足を指図しずしていました。

「おいおい御支配のお通りだ、ほかの旅人は控えているがよろしい、御支配のお通りが済たまんでから通らっしゃい」と言いって、川の兩岸の通行を暫しばらく差押さしおえました。それがために兩岸に多くの通行人が溜たまって、駒井能登守の渡ってしまふのを待っていました。

「どうしたのか、兩岸に人がたかっている」

能登守は不審に思いました。

「御支配様、どうぞこれをお召しなすって下さいまし」

連台れんたいを持って来きました。屈強な男が二十人ほどでその連台かたを担かぐのであります。

「お役人様方は、どうか野郎共の肩にお召し下さいまし」
与力同心の面々は肩車で越えるということでありま

す。そのほか仲間ちゅうげん、槍持やりもち、挟箱担はさみばこかつぎ、馬方に至るまで、みな人足の肩を借りたり手を借りたりして、なかなか大業おわざようなことでありました。駒井能登守はそれと気がついて、

「宿役人、こんな大業なことをしないがよかった」

能登守は仕方がなしにその連台に乗りました。二十人の人足が曳えい々えい声こえを出してそれを担かぎ上げました。甲州に入いつての勤番支配の権威は絶大というべきものです。この街道を通さん参観交代さんかんこうたいの大名はあまり数が多くはないが、それらの大名が通する時よりも、勤番支配の通あまたる時の方が鄭重ていじゆうでありました。能登守は、それがために数多あまたの通行の人を留めてしまったことを気の毒に思おもって、早く手輕に通すってしまいたいのだが、鄭重にするために宿役人は川越し人足の勢揃せいぞろいや人数配りに手数をかけてなかなか時間に時間を取るのであります。能登守の連台がや々と担かぎ出でされて、与力同心の面々の肩車がそれにつづかうとした時に、上野原の方から慌あわただしくこの場へ飛んできたのは誰あろう、宇治山田の米友でありました。

二

米友は例の通り跛足びつこを引いて、杖つえをついて、横よこっ飛とびにこの河原まで駈かけて来て、
「通としてくれ、通としてくれ、俺おれらが悪いんじゃないねえ、まだ出でかけねえと言うから、それで安心して待まちってたんだ、ところが出し抜ぬかれたんだ、あいつの口前にひっかかっ

て、無駄話をしている間に出かけられちゃったんだ、ぐずぐずしていると俺らが申しわけのねえことになっちゃうんだ、どうか通してくれ」

米友は眼の色を変えて川を渡ろうとしますから、宿役人や人足までが驚きました。米友のことですから、あんまり周囲の事情に見さかいたなく、笠と首根ツ子へ結いつけた風呂敷包が上になったり下になったりするのをかまわず、無論、勤番支配であろうが、与力同心であろうが眼中になく、やみくもに川へ飛び込んで押渡ろうとするから、忽ちドッコイと押えられてしまいました。

「やい、手前は何だ」

「通してくれ、通してくれ、無駄話をしているうちに出し抜かれちゃったんだ、こうしちやいらねえ」

「馬鹿野郎」

「何だい、何をしやがる」

「よく眼をあいて見やあがれ、川の向うもこっちも通行どめなんだ、みんなああして御遠慮をしているのがわからねえか」

「遠慮なんぞをしちやあいらねえ、人から頼まれて乗物の目付をして来たんだ、それが先へ出ちまったんだ、俺らはそのつもりじゃなかったんだ、まだ出かけねえと言うから、それで安心して待ってたんだ、悪い奴の計略にひっかかったんだ」

「何を言ってるやがるんだい、この馬鹿野郎、引込んでいやがれ」

人足は拳を固めて米友を殴りつけてしまおうとする

と、米友はその手の下を潜って飛び出し、

「お前たちの手は借りねえんだ、一人で越すからいいよ」尻を引絡げて川へ入り込もうとするから、人足どもがバラバラと駈けて来て米友を囲んでしまい、その手を持つてギョウギョウ引き立て、

「方図のねえ馬鹿野郎だ」

ポカポカと二つ三つ食わせてしまいました。

「おやおや、打ったね」

「まだあんなことを言ってるやがる、叩きのめして簀巻にしてやれ」

「ナゼ打つんだい、ええ、ナゼ俺らを打ったんだ」

「この野郎、ちびのくせに口の減らねえ野郎だ」

「まあ、おじさん待ってくれ、打つんならお打ち、打たれてもいいからその代り、おじさんここを通しておくれ、ね」

米友は、それでも人足と争うことの不利なるを覚つてか、いっぱしの知恵を出して妥協を試みようとしたが、どうしてこの場合、川越し人足が米友の口前ぐらいで承知するものではありません。

「面倒くさいから叩きのめしてしまえ」

争わずしている米友を、またも拳を上げてガンと食らわせました。

「あ、痛え！」

米友も、さすがに面をしかめて痛みを憶えねばならぬくらいに手強く打たれて、思わず片手で頭を押えた時に、続けざまにポカポカと拳の雨が来ましたから、米友の

癩癩が一時に破裂しました。

「もう、勘弁ができません、こいつら甲州街道の川越しの人足ども、あんまり人をばかにしやがる、ここは手前たちの川じゃあるめえ、甲州街道の鶴川だろう、手前たちがこの川を持ってゐるわけじゃあるめえ、天下様の往来だ、俺らが通ってナゼ悪いんだ、渡し賃が要るならくれてやらあ、手前たちは渡し賃を貰って人を渡しさえすりゃいいんだろう、通すの通さねえの、安宅の関の弁慶みたいなごたいそうなことを言うない、富樫にしちゃあ出来過ぎてらあ、第一、手前たちは富樫という面じゃねえ」

さあいけない、米友はまた啖呵を切ってしまった。

米友流の啖呵を切って開き直ると、手に持っていた杖を眼にもとまらない迅速さで取り直して、いま自分を撲つた人足の眼と鼻の間に一刺を加えました。

「あッ！」

その人足はひっくり返る、あとの人足は殺氣が立つ。

人足を一人突き倒して、しばらく彼等を呆氣に取らした米友は、二三間、河原の向うへツツと飛び越して岩の上へ跳ねあがり、

「俺らは伊勢の国から東海道を旅をして江戸の水を呑んで来た宇治山田の米友だ。東海道には天竜川だの大井川だのという大きな川があるんだ、こんな山ん中のちっぽけな川とは違って、水もモットうんとあらあ、そこには川越しの人足も幾百人といふけれども、手前たちのようなわけのわからねえ人足は一人もいなかったんだ。おじ

さん、俺らはこの通り足が悪いんだから、大事にして通しておくれと頼めば、ウン兄い、氣をつけて歩きねえ、転ぶとお前は背が低いから、浅いところでもブクブクウをするよなんて言やがるから、ばかにするな、背は低くても泳ぎが出来るんだいと威張ってやると、あははと笑って通すんだ。手前たちは山ん中の猿だから世間を知らねえや、だから教えてやるんだ、東海道の川越し人足はそうしたもののなんだ、同じ人足でも人足ぶりが違わあ、第一、面からして違ってらあ。俺らが急ぎだから通してくれと頼むのを、事情も聞かねえで、無暗に撲ちやがる。撲たれていいものなら撲たしてやらあ、こつちに悪い尻があるんなら、いくらでも撲たれてやらあ、ここまで来て撲ってみやあがれ。米友が持っておいでなさるこの杖は、杖と見えても杖じゃねえんだ、まかり間違つたら槍に化けるように仕掛がしてあるとはお釈迦様でも氣がつくめえ。やい山猿人足、手前たちは世間を見たことがねえから、この米友がどのくらい槍が遣えるんだかその見当がつくめえ。山猿と言われたのが口惜しけりやここまで来てみやがれ、米友の槍が怖いと思つたら、早く川を通せろやい」

こう言いながら米友は、持っていた杖を片手に取ってブンブンと振り廻し、猿のような面をして白い歯を剥いて罵ると、たださえ氣の荒い郡内の川越し人足が、こんなことを言われて納まるはずがありません。

「ふざけた野郎だ、叩き殺せ」

この騒ぎで、駒井能登守の連台を担ぎかけた人足も、

与力同心の股倉^{またぐら}へ頭を突つ込んだ人足も、みんなそれをやめてしまつて、米友の方へバラバラと飛んで行きました。宿役人は青くなつてその騒ぎを抑^{おさ}えにかかります。

意外の騒動が起つたので、駒井能登守はやむなくその騒ぎを見ていました。与力同心の連中もそれを見ていました。いずれも人足どもの騒ぎ、宿役の連中が取鎮めるであらうから自分たちが手を下すまでもあるまい。それで騒ぎの済むのを待っているうちに、岩の上へ跳^{おど}り上つた米友の無遠慮露骨な罵倒を聞いてハラハラしました。

人足どもも無暗^{むやみ}に撲ることは乱暴だが、川越し人足である、これを通つたものを、東海道の人足とは人足ぶりが違ふとか、面^{つら}まで違ふとか、山猿がどうしたとか、言わんでもよい悪口を言っているのはずいぶん向う見ずの無茶な奴だと思つて、その鎮まるのを待っているが鎮まりません。

「矢でも鉄砲でも持つて来やがれ」

岩の上に立つた米友を下から渦^{うず}を巻いて押し寄せた川越し人足、なにほどのこともない、取捉^{とつつか}まえて一捻^{ひとひね}りと素手^{すて}で登つて来るのを曳^{えい}と突く。突かれて筋斗^{もんどり}打つて河原へ落ちる。つづいて、

「この野郎」

手捕^{てとり}にしようとして我れ勝ちにのぼつて来るのを上で米友が手練^{しゅれん}の槍。と言つてもまだ穂はつけてないから棒も同じこと。

これだから米友は困りものです。くれぐれもその短気を起すことを戒^{いまし}められてはにかかわらず、短気を起してしまいます。無暗に喧嘩を買つてしまいます。槍が出来るといふ自信があるために人を怖れないし、それに、どうしても曲つたことが嫌いだから、ポンポン理窟を言つてしまいます。

不幸にしてただ脳味噌に少しく足りないところがあるらしく、それがために時の場合と相手の利害を見ることできません。役人であらうとも雲助であらうとも更に頓着^{とんちやく}がないから困りものです。お君でも傍にいてなだめたり諫^{いさ}めたりするから江戸へ来て以来はあんまり大きな騒ぎを持ち上げませんでした。大きな騒ぎを持ち上げないこともない、見世物小屋の失敗^{しくじり}などはかなり大きな失敗でしたけれども、それがために古市^{ふるいち}における場合のように、槍を振り廻すことのなかったのはまだしもの幸いでしたが、今はとうとう本式の喧嘩を持ち上げてしまいました。しかもその相手が最も悪い、雲助のなかでも最も性質^{ちち}の悪い郡内の雲助ですから、米友も実に飛んでもない相手を引受けたものです。市川海老蔵^{えびぞう}は甲府へ乗り込む時にここの川越しに百両の金を強請^{ゆす}られたために怖毛^{おぞけ}を振^{ふる}つて、後にこの本街道を避けて大菩薩越えをしたということ。性質^{ちち}の悪いことにおいて甲州街道の雲助は定評がある。その雲助を、あんなことを言つて罵つてしまつたから、その怒り出すことは火を見るようなものです。何のためか、ここの人足は長い竹竿を横にして、それに十数人の人足がつかまつて乗物の先に立つて川を

渡す、今、その竹の竿を担ぎ出して米友を引払ってしまおうとしました。

駒井能登守の一行は不意の出来事に驚いて暫らく立って見ていると、岩の上に立って杖を遣う米友の敏捷なこと。

蟻のように上りかける人足を片端から突いて突き落す。寄手がいよいよ多ければ、いよいよ突き落す。裸体の雲助が岩の上からバタバタと突き落されたところは、ちようど千破剣の城をせめた北条勢が、楠のために切岸の上から追い落されるような有様ですから、目をすまして見物していると、

「こいつら、俺らの懷中にまだ槍の穂が蔵つてあることを知らねえか、今こうして手前たちを突き落しているのはこの棒だけだ、いよいよという場合には穂をつけて、ほんとうに突き殺すからそう思え、今は怪我をしねえようにそつと突いてやるんだ、穂をつけてから、米友がほんとうに荒れ出したら、いちいち突き殺して、この河原を裸虫で埋めるようなことになるからそう思え。何だい、そんな長い竿なんぞを持って来やがって、俺らを叩き落そうと言うんだな。よしよし、そんならほんとうに棒の天辺へ刃物をくつつけるぞ、さあこれだ、これをちやあんと棒の先へつけて槍に組み立てるように仕掛が出来てるんだ、これで突いたら命はねえんだからなそう思え、面の真中でも咽喉仏でもお望み通りのところを突いてやる、ちつとやそつと危ねえんじゃねえや」

米友が懷中から取り出した笹穂は先生自身の工夫で、

忽ちそれを杖の先に取りつけて、その穂を左の掌で握って下へさげ、石突をグツと上げて逆七三の構え、ちようど岩の上に立って水を潜る魚を覗くような姿勢を取ると、足を払いに来た竹の竿、それを身を跳らして避けると、いま上りかけた人足の面の真中から血汐が溢れ出して、

「呀ッ」

仰向けに河原へ落ちる。

「野郎、仲間を突きやがったな、さあ承知ができねえ」血を見ると人足が狂う。

事態、いよいよ危険と見たから、駒井能登守の手にいた与力同心が出動せねばなくなりました。

与力同心の出動によってこの騒ぎは鎮まりました。しかし納まらないのは雲助ども、あんな悪口を言われ、且つ面の真中を突かれた負傷者をさえ一人出している。五分五分の仲裁では納まりようはずがないから与力同心は、両方を押えた後に米友を番小屋の方へつれて来ました。さてその後の裁判がふるっています。

米友に槍で突かれた人足は一人。それは面を突き破られただけで、かなり重い傷には違いないけれど生命に別条はない。だからそれを償うために米友を片輪にしたら承知ができるだろう。しかし米友は跛足であつてもう片輪になっている。この上に片輪にしてしまつては命を縮めることになるから、その代りに頭を坊主にして、それで許してやれという駒井能登守の裁判でした。

能登守も笑いながら裁判しました。与力同心も笑いながら、

「それは御名案、どうじゃ川越しども、それで許してやれ、許してやれ、相手はこの通り正直者だから」

与力同心がこう言うのと、ハラハラしていた宿役人どももまた笑い出して、

「御支配様のお裁判だ、この男を坊主にして笑ってやれ、若い衆、それで我慢してくれ、我慢してくれ」

八方からこう言われて、さすがの川越し人足も納まりかけました。

「あはははは、この野郎を坊主にしたらドンナ坊主が出来上るだ、見たところ餓鬼がきのようでもあるし、ばかに年寄りみたところもあるし、なんだかえたいのわからねえ野郎と、つちやあ、いいから坊主にして笑ってやれ」

「坊主、坊主」

早くも番小屋から怪しげな剃刀かみそりだの鏡台だのが担ぎ出されます。

米友はつまらない面かおをしています。俺を坊主にするなどとは以てのほかだというような面をしていたが、トテモ坊主になるものならおとなしく坊主になってやろうというような、得心をしたようにも見られます。

物好きな宿役人が米友の後ろへ廻って剃刀を取ったが、その剃刀があまり切れないせいか、山葵卸わさびおろしで擦るこすようでありました。痛さを泳こらえてじっとして剃らせている米友、その面もおかしいが、いよいよ剃り上った坊主もかなりおかしいと見えて、一同でやんやと囃はやして笑った

けれど米友は笑わなかった。

「これでいいのか」

坊主頭を振ってみて、それから例の風呂敷包を首根っ子へ結ゆわいつけて、笠を被かぶると、

「俺らは急ぎなんだ」

こう言って横っ飛びに川の中へ飛び込んでしまいました。その挙動が、あんまり無邪気で軽快でしたから、人足どもも笑って、米友がひとりでズンズン川を越して行くのを敢あえて止めませんでした。

この一場の小喜劇がこれで済んで、川彼方かわむこうを跛足を引き駆けて行く米友の形をさんざんに笑いながら、ようやく能登守一行の川渡りが済みました。しばらく遠慮をしていた兩岸の旅客もようやく渡ることができました。

「いや、旅をするとさまざまの面白いものを見るわい、駒木野の関所で見た女、次に小仏を下りて見かけた足の早い男、今またあの奇妙な小男、さてこの次には何を見るか。それにしてもあの小男が槍を使うのは至極の精妙、見たところ、武家奉公をしている様子もなし、出し抜かれた、出し抜かれたと言って駆けて行くが、あの調子ではまた何かにぶつかって大事おわごとを惹ひき起さねばよいが」

駒井能登守はこういって米友の身の上を心配しながら、やはり悠々として甲州入りの旅をつづけましたが、ほどなく鳥沢の宿へ着いてここの本陣で一休み。

鳥沢で休んでいるうちに、またさまざまの雑談がありました。この附近で香魚が捕れてその味が至極よろしいこと、また山葵も取れること、矢坪坂の古戦場というのがあること、太鼓岩、蚕岩、白糸の滝、長滝などの名所があるということ、それから矢坪坂の座頭転がしの難所のことになって、

「房州の小湊へ行く道にお仙転がしというのがあるが、ここには座頭転がしというのがある、座頭転がしとはなにか由緒がありそうな名じゃ、どういうわけで、そんな名前がついたのだ」

本陣の主人が答えて、

「ただ山の中腹に開いてあります路が、羊の腸みたようにうねっておりますから、煙草の火の借り合いができるほどのところへ行くにも廻り廻って行かねばなりません。或る時、二人の座頭が、この道を通ります時、おたがい言葉をかけ合って参りましたが、途中で後ろの者が『オーイ』と申します、前のものが『オーイ』と返事をします、近いところに聞えたものですから、真直ぐに行くと谷へ落ちて死んでしまいました。それで座頭転がしというのだそうでございます」

「この街道は道が峻しいばかりでなく、人気などもなかなか荒いようじゃ」

「人気はなかなか荒いそうでございます、どうも郡内者

といって、旅の者が怖れておいでなさるそうでございますが、住んでいますれば、やっぱり同じ人間でございますから、そんなに荒っぽいとも存じません、頼むとあとへ引かないといったような片意地のところもございまして、附合い様一つでございます」

「この鳥沢に糸という者があるか。鳥沢の糸といって、この界限に知られた男があるそうな」

「へえ、鳥沢の糸、そんな者があるにはあるんでございますが、お話を申し上げるような人体ではございません」と言つて、主人は鳥沢の糸のことをあんまり話したがらない。風景があつたり名物が出たりすることは多少にも自慢にもなるけれど、あんな人間の存在することはあまり名誉とも思わないらしくて、糸のことは問われても語らずに、

「なんしてもこの通りの山の中でございますから、景色と申しても名物と申しても知れたものでございますが、そのうちでも甲斐絹と猿橋、これがまあ、かなり日本中へ知れ渡ったものでござりまする」

「そうだ、猿橋と甲斐絹の名は知らぬ者はあるまい、その猿橋ももう近くなつたはず」

「これから、ほんの僅かでございます、そんなに大きな橋ではございませんが、組立てが變つておりますから、日本の三奇橋の一つだなんぞと言われている。猿橋から大月、大月には岩殿山の城あとがございまして、富士へおいでになるにはそこからわかれる道がございまして。それから初狩、黒野田を通つて笹子峠」

本陣の主人は一通りの道案内を申しました。一行のうちにはここをしばしば通ったものもあるのだから、そんなに委しく言う必要はないと思って手短かに案内をしたが、大部分は初めての甲州入りだから、珍らしがって名所の話をします。ことに日本三奇橋の一つと称せらるる猿橋に近くなったということが好奇心をそそって、

「いったい、その日本の三奇橋というのはどれとどれだ」「周防の錦帯橋、木曾の棧橋、それにこの甲斐の猿橋」一行のうちの物識りが答えます。やがてこの本陣を出て右の猿橋へかかった時分に、そこで一行は、橋以外にまた奇体なものにぶつかることになりました。

鳥沢で休んで駒井能登守の一行がまたも悠々と甲州街道を上って行くと、ほどなく猿橋まで来かかりました。

猿橋は有名な橋。その橋のところへ来ると、往來の人が怖々と橋の左側の方ばかりを小さくなって駈けるようにして通るから、与力同心の面々が不思議に思つて、「ナゼ真中を通らぬ、橋がこわれているならナゼ普請をせぬ」と言つて咎めると、通りかかった男が、

「あ、あの通りでございます」

青くなつて指さしをしたから、その指さしをしたところを見ると、欄干に細引が結えつけてあつて、それから釣忍を吊したように何か吊してあるようです。何が吊してあるのかとよく見定めると人間が一人、四ツ手に絡んで高さ十七間の猿橋の真中から吊り下げてありました。

「こりや怪しからん、誰がこんなことをした」

「鳥沢の親分がこういうことをやりました」

「鳥沢の親分とは何者だ」

「鳥沢の衆という、このあたりに聞えた親分でございます」

「何者であろうとも、斯様な惨酷なことをするのを見逃しておくのは何事じゃ、ナゼ助けてやらぬ」

「衆が申します、これを解いてやった奴があれば生かしちや置かねえとこう申しますから、正直な土地の人は慄え上つてまだ手をつける人はございません」

「憎い奴じゃ、上を怖れぬ仕方、早く引き上げてやれ」与力同心は仲間小者と力を合せて、この細引にかけて吊してあつた人間を引き上げてやりました。

引き上げてみると、もう真蒼になつて息が絶えている模様でしたから、薬をくれたり水をやったりして介抱すると幸いに息を吹き返しました。

「これ、氣を確かに持て」

「有難うございます」

「其方は何者だ、どうして斯様な目に遭つたのだ」

「どうも相済みません、なあに、ちつとばかりこつちの悪戯が過ぎたから、それでこんな目に遭つたんでございます、打捨てておいて下さいまし」

「斯様な惨酷なことを致すものを打捨ててはおけぬ、聞けば鳥沢の衆とやという悪者の仕業じゃやうな。うむ、その衆という者はどこにいる」

「なあに、鳥沢の親分がやつたんじゃあございません、

俺^{わっし}が慰みにやってみたんでございます」

「さてさて、貴様はわからぬ奴じゃ、包まず申せ、貴様のために仇^{かたき}を取ってやる」

「なあに、仇なんぞは取っていただかなくともよろしうございます、おかげさまで地獄から呼び戻されたのが何よりで、それでもう充分でございます」

「貴様はその条とやらしい悪漢を怖れて包み隠すと見えるな、我々が聞いた以上はいかなる悪漢なりとても、後の祟^{たた}りは少しも心配はないのじゃ」

「どう致しまして、たとえ条であろうとも、鬼であろうとも、後の祟りを怖がってそれで包み隠すというようなわけじゃございません、どうか打捨ててお置きなすって下さいまし」

「貴様が白状しなければ別に調べる道もある、ともかく我々と一緒に本陣まで同道せい」

「どうか、このままお免^{ゆる}しなすって下さいまし、歩けません」

こんな酷^{ひど}い目に遭わされながら何とも訴えないのは、そこに何か仔細がなければならぬと思って与力同心の面々は、この男を引き立てようとした時に気がついたのは、この男に片腕のないことでした。

これより先、猿橋の西の詰^{つめ}の茶屋の二階で郡内織の襦^{どてら}袍を着て、長脇差を傍に引きつけて酒を飲んでいた一人の男がいました。年は五十に近いのだが、でっぷりと太って、額^{ひたい}際^{ぎわ}に向う傷があつて人相が陰^けしい。これは前にしばしば名前の出た鳥沢の条という男でありま

す。

条は二階から障子をあげ払って猿橋を一目にながめながら、

「どうだい、野郎をあんなにしてやった、いい心持だろう、あんなのを眺めて酒を飲むとよっぽどうめえ」

条は猿橋の真中から、亀の子のようにがんりきの身体を吊下げて、それを見ながら酒を飲んでいたのであります。

「親分、どうか許して上げてください、あの人も悪いところがあるんでしょうけれど、あんなにまでなさらないでもよろしうございます、どうか助けてやって下さい」
「いいや、いけねえ、あの野郎には、あれでもまだ身に沁^{しみ}みたというところまでは行かねえんだ、もうちつと窮^{きゆう}命^{めい}さしてやる。お前もよく眼をあいて見ておきねえ、なんで下を向くんのだ、よ、高さは僅か三十三尋^{ひろ}とちつとばかり、下はたんとも深くねえが、やつぱり三十と三尋、甲州名代^{なだい}の猿橋の真中にブラ下って桂^{かつらがわ}川見物をさせてもらうなんぞは野郎も冥^{みよう}利^りだ。お前も可愛^{かわい}がったり可愛^{かわい}がられたりした野郎だ、よく見ておきねえ、なにもそんな処女^{きむすめ}みたように恥かしがって下を向くことはねえじゃねえか」

鳥沢の条の傍にいる女、それは女軽業の頭領のお角であります。

「親分さん、どうか助けて上げて下さいよう、死んでしまします、悪い人は悪い人でも、あれではあんまり酷うございますから、早く解いてやって下さいよう」

「いいや、いけねえ。お前もずいぶん、女子供を買って来て危ねえ芸当をさせて銭をもうける職業に似合わねえ、あのくらの仕置が見ていられねえでどうする。野郎に軽業をさせて今日はお前と俺がお客になって見物するんだ、この棧敷は買切りだから誰に遠慮もいらねえ、首尾よく野郎の芸当が勤まれば、二人の手から祝儀をくれてやらあ」

「親分、どうしても解いて上げることができなければ、いっそ殺してしまつて下さい、あんな目に会わされているより、一思いに殺されてしまった方がよいでしょうから。わたしも見ていられないから、早く殺してやつて下さい」

「殺しちまっちゃあ、身も蓋もねえや、ああいう野郎にはいろいろの芸当をさせてみて、死にかかったらまた水を吹っかけて生き返らして、またやらせるんだ。まあ、お角、一杯飲みな。俺がああ野郎をあんな目に遭わせるから、俺は鬼か魔物みたようにお前の目に見えるか知れねえが、ずいぶんああしてやっていい筋があるんだ。ああ野郎の生立から国を出るまでのことを残らず知ってるのが俺だ、俺にああされてああ野郎には文句が言えねえ筋があるんだ、俺にああされたから野郎は本望ぐれえに心得ていやがるだろう、これからゆっくりその話の筋を語って聞かせてやるから、落着いて聞いていねえ、それを聞いているうちにはなるほどと思うこともあるだろう、俺が酔興であんな軽業をさせるんじゃないかと思う節もあるだろう……おやおや、役人が大勢来やがったな、

あ、百の野郎を引き上げたな。うむ、土地のやつら俺を憚かって手が着けられねえのを、木端役人め、出しやばりやがったな、面白え、どうするか見ていてやれ、百の野郎がなんとぬかすか聞きものだ」

駒井能登守の一行はその晩、猿橋駅の新井というのへ泊りました。がんりきの百は一間へ引据えて置いたが、息の絶えるほど弱っているのだから、縄をかけるまでもあるまいと、与力同心は油断をしてそのまま置きました。

「鳥沢の条という者を呼んで、ともかくもこの男と突き合せて見給え」

能登守は命令の形式でなく、どうでもよいことのようにこう言つて引込んでしまいました。

与力同心の連中は、ちょうど慈恵学校の生徒が解剖の屍体をあてがわれたような心持で、がんりきの再調べに着手すると共に、いわゆる鳥沢の条なる者を引き出そうとしました。

ところが条はただいま外出して行方が知れないという返事であつたから、更にその行方を厳しく詮索させることにして、一方にはがんりきの百を三度目に引き出して調べてみました。いろいろにして泥を吐かせてみようとしたけれども、前と同じように百はいっこう口を開きません。あんな目に遭わされて、相手の罪を訴えないことがだいいち不思議であります。

「なあに、俺が悪かつたんでございますから、殺され

たつて仕方がねえんでございますから」と言つたきり。

「貴様は、たいそう足の早い奴だな」

「へえ、歩くのは達者でございます」

「貴様は片腕が無い、それはどうしたのだ」

「これは怪我をしたから、お医者さんに切ってもらつたんでございます」

「貴様は髪結渡世だと言つたが、その片腕で髪結ができるのか」

「へえ、両腕の揃つていた時分に叩き込んでありましたから、まだそれが片一方の方へいくらか残っているのをごさいます、けれども碌な仕事はできませんからこのごろは職人任せでございます」

「貴様は身延へ参詣に行くのだと申したがその通りか」

「左様でございます。お祖師様を信心致しますから、それで身延山へ参りてえと思つて出かけて参りましたんで」

「身延の道者ならば講中とか連とかいうものがありそうなもの、一人で出て歩くというは怪しからん」

「それが、なんでございます、俺共は何の因果か人並みより足が早いんでございますから、講中の衆やなんかと一緒に歩いていた日にはまだるくてたまりません、それでございますから、どこへ行くにも一人でトットと出て行くんでございます」

「貴様が手形をもつておらんというのがどうしても怪しい、所、名前をもう一度そこで申してみろ」

「先にも申し上げた通り、手形を持っていたんでございますが、あの橋の真中へ吊される時に下へ落つこつてしまつたんでございます、桂川の水の中へ落してしまつたんでございます。所、名前は山下の銀床の銀といつて：

「よし、では鳥沢の糸を呼び出してからまた吟味をする、さがれ」

一通りの調べを受けて、がんりきの百は次の間へ下げられて燈火もない真暗なところへ抛り込まれてしまいました。

「何だつまらねえ、猿橋を裏から見物させてもらうなんぞは、有難いくらいなものだが、こう身体が弱つてしまつたんじやどうにもやりきれねえ、今までのお調べは通り一遍だが、これから洗い立てられりや、どのみち、銀流しが剥げるにきまつてる、いつものがんりきならここで逃げ出すんだが、身体の節々が痛んで歩けねえ」と独言を言つてがんりきはコロリと横になりました。

夜中になるとがんりきの耳の傍で囁く声がしたから、がんりきはうとうとしていた眼を覺ました。

「百、しっかりしろ」

「兄貴か」

「野郎、また遣り損なつたな、いいから俺と一緒に逃げろ」

「兄貴、動けねえ」

「意気地のねえ野郎だ、さあ俺の肩につかまれ」

「俺を荷物にしちやあ兄貴、お前も動きがつくめえ、打捨

「っといってくれ」

「手前を打捨っておきやあ、俺の首も危ねえんだ、早くしろ」

「それじゃせっかくだから、お言葉に甘えて御厄介になるべえ」

「人に世話を焼かせずに、自分から動き出す気にならなくちやいけねえ」

こうしてがんだりきを助けに來た奴と、助け出されて行くがんだりきは窓から逃げて行きました。窓を上手に切つて、身体の自由になるようにして、細引で縄梯子なわばしこがかけであつたのを上手に脱け出したから、旅に疲れた与力同心の面々も更に気がつきませんでした。

「兄貴、よく来てくれた」

「ほんとうに世話の焼けた野郎と、つちやあ」

「どうも済まねえ」

「ははあ、今度という今度はいくらか身に沁しみたと見えて弱い音を吹き出したな」

「どうにもこうにも身体が痛んでやりきれねえ、そりやそうと、兄貴、俺がここへ捕まってることがどうしてわかつたんだい」

「初狩はつかりまで行ったところが、通りかかる馬方の口から變なことを聞いたもんだから、それで、もしやと引返してみたんだ」

「そうか。兄貴の前だが、猿橋を裏から見せられたのは今度が初めてよ」

「鳥沢の糸の野郎がそうしたんだというじゃねえか。野

郎あんまりふざけたことをすると思つたから、わざわざ引返して來て見ると、糸の野郎もいなけりやあ、手前の姿も橋のまわりには見えねえから聞いてみると、これこれのわけで、役人につかまって吟味最中ということだから、暫らく三島明神の裏に隠れて夜の更けるのを待つて、それから忍んで行つてみたんだ」

「おかげさまで命拾いをしたようなもんだが、なにぶんこんな身体が弱つていた日にや所詮しよせん遠道は利かねえ、あの役人というのが、勤番支配なんだから、一度はこうして助けてもらつても、あいつらに睨にらまれた上はどうもこの道中は危ねえな」

「なるほど、この様子じゃあ、どこかで二三日保養をしなければあトテモ物にはならねえようだ。と言つて、勤番支配を向うに廻したんじゃあ、滅多な家へ駈込むわけにもいかず……そうだ、いいことがある、これから糸の野郎のところへ押しかけて行こう、あの野郎、この界限かいがいの親分面をして納まってるのが癪しゃくだ、これから二人で押しかけて行つて、手前を預けて來ることにしようじゃねえか」

「糸の親分のところへ出直しに行くんだな。兄貴が一緒に行つてくれたら向うもマンザラな挨拶はすめえから、それじゃ、そういうことにしてもらいましょう。それから兄貴、お前が俺を出し抜いて甲府へ立たせたあの御新造と娘は、ありやあ今どこにいる」

「ははは、まだそんなことを言つてるのか。ありや今晚しもはつかり下初狩へ泊っているから明日は笹子峠へかかるんだ、あ

の峠が危ねえと思ったから、俺が附いて行くつもりであったが、手前がこんな様子じゃあ二三日は安心ができる、二三日安心している間には甲府の城下へ一足お先に着いているから、甲府まで送り込んでしまえば、俺の肩が休まるんだ。百、お気の毒だけれど、とうとう物にならねえらしいぜ」

「ふふん、まだそう見縊ったものでもねえ」

四

与力同心の面々はその翌朝になって仰天しました。

逃げられてしまった。たかを括^{くく}っていたために逃げられてしまった。逃げられたのよりも逃げたのが不思議であると思いました。あんな死にかけた身体で、どうして逃げ出したか。

旅の一興で練習問題として扱われた代物^{しろもの}ではあるけれども、逃げられたのは不面目である、役人の名折れにもなるから黙っているわけにはいかないとあって、与力同心の面々は駒井能登守にこのことを申し出でて恐縮すると、

「このたびの甲州入りは、なにもあの者共を追い廻すために来たのではない、歩いている間に打突^{ぶつ}かって来たら、捉^{つか}まえてみるがよし、逃げて行ったら逃がしておくがよし」

そこで、今までのひっかかりはいっさい断ち切ってしまつて、翌朝駒井能登守の一行は猿橋駅を立ち出でて、

またも悠々として甲州道中をつづけました。

猿橋^{さるはし}から殿上^{とのうえ}、横尾、駒橋^{こまばし}を通じて大月へ出た時分に、「この大きな一枚岩のような山、これが武田の勇将^{ゆうしょう}小山田備中守^{おやまだびちゅうのかみ}が居城^{いわけ}岩殿山^{いわたのさん}、要害としても面白いが景色としても面白い。備中守信茂^{のぶしげ}はたしかこの城で二度の勇氣を現わしているようだ。一度は村上義清の手から逆襲された時、五十余人でこれを守って守り通してその間に信玄の援兵が来た。二度は武田の末路の時、織田の兵をここで引受けて備中守が斬死^{きりしに}した。武田家にはさすがに勇士がある、天険がある、この天険あり勇士あつてついに亡びたのは天運ぜひもなし」

「いかにも、武田家の武略には東照権現も心から敬服しておられた。徳川家の世になって甲州の仕法^{しほう}は、いっさい信玄の為し置かれたままを襲用して差支えなしということであつたが、ただ一つ、甲州の軍勢が用いた毒矢だけは使用相成らずと東照権現のお声がかりであつた。信玄は毒矢を平気で用いておられたが東照公はそれをお嫌いなされた、そこに両将の器量の相違がある」

「信玄公は、智略において第一、惜しいことに人情に乏しい、民を治める^{おさ}ことは上手であつたにかかわらず、その徳が二代に及ばず、その術が甲斐信濃以上に比べるととがでなかつた。越後の上杉謙信はそれに比べると勇氣第一、それとても北国を切り従えたのみで上洛^{じょうらく}の望みは遂げず、次に織田右大臣、よく大業を為し得たけれど、その身は非業^{ひごう}の死。豊臣太閤に至つて前代^{ぜんだい}未聞^{みもん}の盛事。それもはや浪花^{ななわ}の夢と消えて、世は徳川に至りて流

れも長く治まる。剛強必ず死して仁義王たりという本文を目のあたりに見るようじゃ」

例によって官用だか名所見物だかわからないような調子で歩いて行きました。

駒井能登守のつれて来た与力同心は、大抵若い連中でありました。なかに老巧者もないことはないが、話の中心になるのは若い連中であつたから、ややもすれば批評が出たり、議論が出たりします。

「何といつても信玄と謙信の食い合いが戦国時代ではないちばん力の入った相撲だ。すべて相撲は段違いでは面白くないし、そうかといつて同じ型の相撲が力づくで揉み合うのも面白くない、そこへゆくと謙信の勇に信玄の智、義を重んずる謙信と、老獪な信玄と、型が違つて互角なのが虚々実々と火花を散らして戦うところは古今の観物だ。まあ、あんな相撲はおそらく日本の戦争に二つとはあるまいな、戦国の時代ではまさにあれが両大関だ」

「それはそうに違いない、川中島の掛引は軍記で読んでも人を唸らせる、実際に見ておいたら、どのくらい学問になつたか知れぬ。我々は不幸にしてその時代に遭わなかつたことを憾むくらいのものだが、しかしなお遺憾なことは、あの両大関を空しく甲斐と越後の片隅に取組ましてしまつて、本場所へ出して後から出た横綱と噛み合わせてみなかつたことが残念だな」

「それは誰でもそう思う、信玄と謙信が、もう少し長生をしていたら、トテモ信長公が天下を取るわけにはゆかぬ、信長公が世に出なければ太閤というものも世に出る

わけにはゆかぬ、太閤が出なければ日本の歴史がまたどんなふうになつていたか見当がつかぬ。それを考えると、信玄、謙信という人たちの日本の歴史上の潜勢力もまた大きなものと言わねばならぬ」

「しかし、実際の力はどうであつたろう、信玄や謙信が果して信長や太閤や東照公と戦つて、それを倒し得たであらうか。それらの人たちも、小競合はしたけれども、本場所で晴れの勝負をしたことはないから、ほんところろはいずれが勝りいずれが劣ると判断はつけられない」

「そりやわかりきつた問題だ、謙信に対する信長は、いつも勝味がなかつた、謙信は信長を呑みきつていた、信長はたえず威圧されて怖れていた、謙信が、いで北国人の手並を見せてくれんと、まさに兵を率いて京都へ来たらんとする時、信長は蒼くなつて慄え上つた、ちやうどその京都へ出ようとする途端に謙信が病気で死んだ時は、信長はホツと息をついて、手に持っていた箸を抛り出したというではないか」

「それはそうであつたかも知らぬ、それを事実とすれば信長というものがあまりに弱い、少なくとも木下藤吉郎を家来に持つていた信長、味方の全軍が覆没しても驚かず、桶狭間で泰然としていた信長、たとえ一目なり二目なり置いていたとはいえ、そう無惨な敗れを取るようなこともなかつたろうと思う」

「どうして、今川義元や斎藤道三、或いは浅井朝倉あたりとは相手が違う、謙信があゝの勢いでもって、北国から

雪崩^{なだれ}の如く一瀉千里^{いつしゃせんり}で下って来て見給え、木下藤吉郎なんぞも、まだ芽生^{めばえ}のうちに押しつぶされて安土^{あづち}の城が粉のようになつて飛ぶ。謙信をもう少し生かしておいて、あの勝負だけはやらせてみたかった」

「ところで、そうになると、武田信玄が黙って見てはいない。信玄と謙信とは、今いう通り型が違って力は互角であつたけれども、気位の上では信玄は謙信を白い眼で見ているやうなところがあるわい。謙信を都へ上せて織田と噛み合わせたそのあとで、ねちりねちりと道草を食つて腹を太らせながら乗り込んで行くという、しぶとい芸当をやるのがこの入道だ。不幸にしてその時は、あんまり坊主の当り年でなかったと見え、武田入道が亡くなる間もなく上杉入道がなくなつた」

「謙信が死んで悦^{よろこ}んだのは織田公だが、信玄が亡くなつて運が開けたのは家康公だ、謙信あるうちは信長公の志は遂げられなかつたように、信玄存する間、家康公も實際手も足も出せなかつた御様子だ」

「しかし、信長公も家康公も、信玄、謙信とはともかくも手合せをしておられるけれど、太閤だけは、ついぞ張り合つてみたことがないやうでござるが、あの太閤の軍^{いくさ}ぶりと、信玄、謙信あたりと掛け合わせてみたらどんなものであつたらう。信玄、謙信に向つては織田公も家康公も二目も三目も置いたやうな軍^{いくさ}ぶりをしておられたが、太閤ならばどんなものであつたらうか知ら」

「それは手合せがなかつただけに面白い見立^{みたち}にはなる。後に太閤の世になつてから、太閤がこの甲州へ来て、信

玄の木像を叩いていうことには、お前も早く死んで仕合せな坊さんだ、いま生きていたならばおれの馬の先に立つて、下座^{げざ}触^{ふれ}をするやうなことになるのだと言つて笑つたそうだが、太閤の眼から見ると、そんなものであつたかも知れない」

「いや、太閤という人は、派手^{はで}師^しで人気を取るのが上手、いつもそんなことを言つて人を慍^{しやうふく}伏^{ふく}させるのだが、信玄とても、それほどやすくはない。現に太閤なども家康公の弓矢には閉口しておられた、その家康公を苦しめたほどの信玄だから、太閤のやうな派手師にとっては、謙信よりも信玄の方が苦手かも知れぬ」

こんな話をして小山田備中の城、岩殿山の前をめぐりながら進んで行く。

「この城によつて反^{そむ}いたものがあるから、勝頼が天目山にちぢまつて最期^{さいご}を遂げることになつてしまつたということじゃ。小山田備中は果して忠臣であり、勇士であつたらうか知らん。ともかくにも要害は要害じゃ」

大月を過ぎて初狩、立川^{たてかわら}原、白野^{しらのお}から阿弥陀^{あみだ}街道を練つて行く。

「山国とは言いながら、どっちを見ても山ばかり、よくもこう山があつたものじゃ。岩殿山が要害なばかりではない、甲州全体が一つの要害じゃ、小仏なり、笹子なりに兵を置けば、いかなる大軍も攻め入る手段^{てだて}はなかつたらう、一夫これを守れば万卒も越え難しというのはまさにこれじゃ。東の方はこれで、南はまた富士川口があるばかり、西と北とは山また山、信玄も豪^{えう}かつたには相違ないが、

この要害で守るに易く攻めるに難い地の理がよろしい。およそ四海に事を為す能わざる時に、この山国に立籠たてこもつて天下の勢せいを引受けてみるも一興ではないか」

「左様な要害なればこそ、この国が天領であって、柳沢甲斐守以外には封ほうを受けたものが一人も無い。まंनीち江戸城に事起った時は、この城がいかなるお役に立つやも計り難し。そうなると我々の勤めもまた重い」

阿弥陀街道を過ぎると黒野田の宿しゆく、ここは笹子峠の東の麓で本陣があります。日脚ひあしはまだ高いけれど、明日は笹子峠の難所を越えるのだから、今夜はここへ泊るこ
とになりました。

この黒野田へ泊ったものは駒井能登守の一行ばかりではありませんでした。本陣へは先触さきふれがあつて能登守の一行が占領してしまつたけれど、林屋慶蔵というのと、殿村茂助という二軒の宿屋にも少なからぬ客が泊つていました。

笹子峠を下つて来た客もこの黒野田で宿を取る。笹子峠へ上ろうとする旅人もここで泊つて翌日立とうとするのだから、自然に足を留める。それに今日は勤番支配の一行が入り込んだから、この小さな山間の小駅が人を以て溢あふれるという景氣になつてしまいました。

駒井能登守の一行が本陣へ着いてしまつてから、少しばかりたつてこの宿へ入り込んで来た二挺の駕籠がありました。駕籠の中は何者だか知れないが、その傍に附いているのが例の米友であることによつて大抵は想像されましよう。幸いにして米友は託された人の乗物に追いつ

くことができたらしい。

五

二つの駕籠の宿しゆくの休所へ駕籠を下ろして本陣へ掛合いにやると、

「今晩は御支配様のお泊りでございますから」

と言つて、余儀なく謝絶ことわられました。林屋というのと殿村というのと、そのいずれも満員です。満員でないまでもその空間あきまというのは到底、この乗物の客を満足させることができないものばかりでしたから、さてここへ来て途方に暮れ、

「弱つたな」

米友が弱音を吹きました。

「兄さん」

駕籠の中から垂たれを上げて、米友を呼びかけたのはお絹でありました。

「何だ」

「この本陣に泊っている御支配様というのは、何というお方だか聞いてみて下さい」

「おい、茶店のおじさん、本陣に泊っている御支配というのは何というお方だか知っているかい」

「へえ、それはこのたび、甲府の勤番御支配で御入国になります駒井能登守様と申しまするお方でございます」

「御新造ごしんぞうさん、お聞きなさる通り駒井能登守というお方

だそうでございますよ」

「駒井能登守……その方ならば、わたしが少し知っている」

とお絹が言いました。

「兄さん、おまえ御苦労だが、その駒井の殿様へ掛合いに行ってくれないか」

「俺らが掛合いに行ったところで……」

米友はさすがに躊躇します。米友もそういう掛合いに適任でないことを自覚しているのです。槍を取ってこそ宇治山田の米友だけれども、大名旗本を相手に掛合いをする柄でないことを知っているから、それで尻込みをしたがると、

「もと四谷の伝馬町にいた神尾主膳からの使でございますと言つてごらん、そうして主人の勤め先の甲府へ参る途中でございませうが、女ばかりで泊るところに困つておりますからと、事情を話して頼んでごらん。いいかえ、いつものようにポンポン言つてしまつてはいけませんよ、丁寧に言つて頼まなければいけませんよ。と言つてもお前さんのことだから何を言い出すかわからない。それではわたしが手紙を書きませう、手紙を書いて駒井様宛にお頼み申してみませう、お前さんはその手紙だけ持つて行つて、お返事を伺つて来ればよいことにしましょう」

と言つてお絹は駕籠から出て、休茶屋で手紙を書いて封をしました。

駒井能登守は黒野田の本陣へ着いて休息していると、

「申し上げます、ただいま四谷伝馬町の神尾主膳様のお使と申しまして、この手紙を持参致しました」

「ナニ、神尾の手紙？」

能登守は、少々意外に思つて取次の手からその手紙を受取つて見ると女文字でありました。

「甲府詰の主人神尾方へ参る途中の者、女連にて宿に困る……はあ、なるほど」

能登守は早速その手紙を捲き納めながら、

「主人を呼ぶように」

本陣の主人が急いで出向いて来て、遠くの方から頭を下げました。

「お召しでございましたか」

「当家には我々のほかにも客があるであろうな」と能登守が尋ねました。

「どう致しまして、御支配様のお着きと承り、ほかの客はみんなお断わり申し上げて、近所の宿屋へ頼みましてございませう、御支配様のお連れのほかには決してどなたもお泊め申しは致しません」

「それは困る、我々を通るのにそんなことをしてもらつては人も迷惑する、自分も迷惑する、泊りたい者には部屋あの空いている限り泊めてやらなくてはならぬ」

「恐れ入ります」

「今、斯様な手紙を持たせてよこした者がある、女連で宿がなくて困却すると書いてある、急いで泊めるようにしてもらいたい」

「恐れ入りました、お言葉に甘えましてそのように取計

らいを致します」

主人は畏^{かしこ}まって出て行きました。

まもなく本陣の主人が迎えに行つて、そうしてお絹の一行を案内して来ました。米友もまたお絹一行について案内されて来ました。お絹の一行といっても、それは米友のほかにはお松があるばかりでした。お絹は例の通り町家の奥様のようになりをしていました。お松は御守殿^{ごしゅでん}風^{ふう}をしていました。

この二人が駕籠から出た時には、さすがに泊っている人の目を驚かせました。与力同心の面々なども、この思いがけないあい宿^{やど}の客の奥へ通るの目を澄ましていろいろに噂の種が蒔^まかれました。あれは能登守殿の親戚の者だろうと言う者もありました。いや御支配の夫人……にしては少し老^ふけている——というものもありました。

江戸から連れて来たのでは人目もうるさいし、人の口もあるから、わざと道中を別にして、この辺で落ち合う手筈で来たのだらうと考えるものもありました。そんなはずはないというものもありました。能登守はそういう性質^{ちち}の人ではないと弁護をするものもありました。

甲州道中で、山を見たり雲助を見たりしていた眼で、二人の女を見たから、目を驚かせることがよけいに大きかったと見えて、暫らくはその噂で持切りでした。そうして結局は、その何者であるかを突留めなければならぬ義務があるように力^{ちから}瘤^{こぶ}を入れたものもありました。けれどもこの水々しい年増と美しい娘とが奥へ通^とつたあとで、一同は吹き出さなければならぬことに会^{であ}くわして

しまいました。

それは二人につづいて米友がこのこと入つて来たからであります。笠を取るまではそんなに眼につかなかつたけれども、笠を取つて見ると米友の剃^{そり}立ての頭が、異彩を放っていることがよくわかるのであります。剃^{そり}立てといえ、青々としてツルツルしたように考えられるけれど、米友のはよく切れない剃^{かみ}刀^{そり}で削^{けず}ったのだから、なかなかテラテラ光るというわけにはゆかないのです。ところどころに削り残された鈍^{かみ}屑^{くず}が残っているのです。あります。けれども当人は、やむを得ないような面^{かお}をして二人につづいて上り込んで来たから、誰もそれを見て吹き出さないわけにはゆきませんでした。

「兄さん、お前の頭を見て皆さんが笑っていますよ」

お絹は振返つて米友の頭を見て、自分もおかしくなつて口を袖で隠しました。

「でも家の中で笠を被^{かぶ}るわけにはいかねえ」

といって米友が不平な面をしましたから、お松はそれがまたおかしくつて笑いました。

能登守の一行は「なるほど、こいつだな」と思いました。昨日、鶴川での出来事を知っているだけによけいにおかしくなります。

「生^はえ揃^{そろ}うまで頭巾^{ずきん}でも被^かつていたらいでしよう」

「鶴川の雲助の野郎が、こんなにしやがった、ほんとに憎らしい野郎共だ」

米友は口の中でブツブツ言つて、自分の頭をこんなにした雲助どもを呪^{のろ}います。

米友は、お絹とお松とがいる次の部屋へ陣取り、お絹お松の部屋と中庭を隔てたところがすなわち駒井能登守の部屋であります。

お絹は取敢えず御都合を伺った上で、能登守のところへお礼を申し上げに行ってきました。

能登守は快くお絹と対談して女連の道中を慰めたりなどしました。駒井の許を辞して帰ってからお絹の胸には、駒井能登守を対照としての一つの心持が浮びました。

甲府へ行けばこの人は、自分の元の主人の神尾主膳の上へ立つ人だと思いました。同じ旗本でありながら、一方は支配する人、一方は支配される人とお絹は思いました。

そうして、自分よりも年が若いし、神尾よりもまた若い駒井能登守の幅が利くのかと思うと憎らしくなりました。なんとかしてやりたいという気になりました。

お絹の思うには、けっきょく男は脆いものであるというものでした。まだ三十前後の能登守、たとえ相当の学問や才気があったところで知れたものである。固いということは、女に接する機会がない間に限ったことで、相当の手練を以てすれば、男は必ず色に落ちて来るものである。固いようなものほど落ちはじめたら速度が強いということが、お絹の日頃から持っている信念でありました。だから駒井能登守が、いま甲州道中を、飛ぶ鳥を落とす勢いで練って行く時に、これをどうにかしてやりたいということとは結局、お絹が持っている唯一の信念から出立するという事に帰着しますので、大へんやかましい

ことです。

駒井能登守に会ってお礼を言ってから、そんな心持を起してお絹は自分の部屋へ帰って来て、

「お松や」

「はい」

お松は静粛に返事をしました。

「お前は後程お茶を立てて駒井の殿様に差上げておいでなさい、それから、まだお風呂がお済みにならぬ御様子だから、お前は殿様のお伴を申し上げてお風呂のお世話を申し上げねばなりません。こんな山家のことで、氣の利いた女中はいないし、ああして殿方が女氣なしの旅をしておいでなさるのは、何かにつけて御不自由でいらっしゃるし、こうして今夜も私たちが安心して宿へ着くことのできたは、みんなあの殿様のおかげ、それにあのお方は甲府の勤番支配といって、うちの殿様よりはズット上席のお方、神尾の殿様はあれだけのお方だけれど、この駒井の殿様はこれからお大名になるか御老中になるか、出世の知れないお方」

お絹は、こう言ってお松を説きました。お松はいちいちそれを聞いていましたけれど本意でないことがいくらかあります。自分の甲府へ行こうというのは、神尾の殿様だとか、駒井の御支配様だとかいうお方のお氣に入られようと思つて来たはずではないけれど、ともかくもこの場合、一通りの御用と御挨拶はつとめねばなるまいと思ひました。好意を持ってくれた目上の人に対する礼儀という心から、そうせねばならないものかと思ひました。

駒井能登守はこうしていても、毎日宿へ着くと、書類を調べたり手紙を認めたりすることでほとんど暇がありません。

書類の多くは公用のもの、手紙は公用と私用とが相半するくらいでありました。それらを一通り処理してしまつたあとで、能登守が興味を以て書く手紙が一つありました。

「今日は笹子峠の麓なる黒野田といふ処に泊り申候、明日笹子峠へかかる都合に御座候、これより峠を越えて峠向ふの駒飼といふ処まで二里八丁の道に候、小仏峠と共に此の街道中での難所に候、笹子を越え候はば程なく勝沼にて、それより甲府までは一足に候、さすがに峠と申すだけの事はありて、中々難渋な山道に候へども一同皆々元氣にて、名所古蹟などを訪らひつつ物見遊山のやうな心持にて旅をつづけ居り候、また人事にも面白き事多く、土地の名物や風俗などにも少しく変つた事有之候、言葉もまた江戸より入り候へば甲州特有の言葉ありて面白く覚え候、昨日はまた甲州名代の猿橋といふのを通り申候、これは名所絵などに御身も御承知の事と存じ候へ共、猿が双方より手を延ばしたるやうの形にて、土地の人は橋より水際まで三十三尋、水際より水底まで三十三尋も有之候様に申し居り候処、その間に一本の柱も無く組立て候事が奇

妙に御座候、甲州は評判の如く荒き処あり、途中も心して見聞致し居り候。

さて御身の御病氣は如何に候や、われら斯くの如き愉快なる旅をつづけ居り候うちにも常に心にかかり候はこの事のみ候、追々寒さにも向ひ候べく、一しほお厭ひなさるべく候、昨日受取り申候たよりによれば少しく快方との事、やや安心は致し候へども、甲府入りを致したしとは以ての外に候、少々快方に向ひたればとて心に弛みを生じてはならず候、再三申し候通り此の道は男子も憚る險道、それを女の身にて、殊に病中の身にて旅立たんなどは想ひも及ばぬ事に候、左様の心を起さず当分は御静養專一に可被成候、冬を越して来春身体と共に陽氣の回復する頃を待ちて御入国なされ候へ。

今日も女連の二人の者同じく江戸より出でて甲府へ赴く由にて此の宿へ着き申候、御身が甲府入りを致したしとの書状と思ひ合せてをかしく存じ候、右の婦人達もたえず駕籠乗物に揺られ、人氣の陰しさに胆を冷し随分難渋のやうに見受けられ笑止に存候」

駒井能登守には奥方があるのでした。それはこの手紙によつても察することができるようにかなり重い病氣、かなり永い患いにかかつて江戸に残されているのです。その奥方に宛てて能登守が毎日のように手紙を書いては送り、奥方からもまたこの道中の都度都度に音信のあることがわかります。能登守も若いから奥方も若いに違いない。能登守も綺麗な人だから奥方も美しい人に相違な

い。若くて美しい二人は結婚して、そんなに長い間でないこともわかっています。新婚の若い男と女、たとえお役目柄の厳めしい能登守にも情愛がなければならぬはずであります。ましてや奥方にはそれに一層の深い情愛がなければならぬはずであります。重い病氣と、永い患いとが二人の中を隔てました。その隔てはこうして毎日のように書いているおたがいの消息によって、美しく結ばれているということが想像されるのであります。

駒井能登守が手紙を書き終ったところへ、お絹から言いつけられた通りにお松がお茶を捧げて入って来ました。

「御免あそばしませ」

「これはこれは」

と能登守は言いました。

能登守は風呂に入る前に、書類や手紙の用を済ましてしまうのが例であります。お松がお茶を捧げて来たのはちょうどよい折でありました。

能登守は、お茶を捧げて来たお松の様子を見ると、どうもこの宿あたりにいる女中とは思われないから、

「そなたは、この家の娘御か」

と言って尋ねてみました。

「さきほどは伯母が上りましてお目通りを致しました」

「あ、左様であったか」

宿を周旋してやったためにお礼に来たさきほどの女、この娘はその連か、そうしてさきほどの女が氣を利かし、この娘にお茶を持たしてよこしたのだろうと思ひ当

りました。

「何ぞ、御用がござりましたなら、仰せつけ下さるやうにとの伯母の申しつけでござりまする」

と言って、お松は能登守の前に指を突きました。

「それは御親切ありがたいが、別に用事といって……」

能登守はちょうど眼を落したのが、いま書いていた手紙であります。せつかくのことに、

「大儀ながらこの手紙を、明朝の飛脚で江戸へ届けてもらうように、この宿の主人へ手渡し下されたい」と言つて、その手紙を拾つてお松に渡しました。

「畏まりました」

「あの先刻の婦人は、そなたの伯母でありましたか」

「はい」

「よろしく申して下されよ」

お松はこうしてお茶を捧げて来て、手紙を持って能登守の許をさがる時に、まことに好い殿様だと思いました。怖いお役人様のお頭であろうと思つて来たのに、打つて變つて優しく思いやりがありそうで、そうかと言ってニヤけた御人体は少しもなく、氣品の勝れていることを何となく奥床しく感じてしまいました。

お絹はお松が能登守から頼まれたという手紙を自分が受取つて、お松に向つては、

「今、殿様がお風呂においであそばしたようだから、お前は行つてお世話を申し上げて下さい、失礼のないやうに」

と言いつけました。

お松はその言いつけをも、温和しく聞いて風呂場の方へ行きました。そのあとでお絹は能登守の手紙を手にとってつくづく眺めていました。表には「江戸麹町二番地、駒井能登守内へ」と立派な手蹟で認めてあります。

それを見ると、お絹はまたむらむらと変な心が起りました。この手紙は能登守からその可愛い奥方に送る手紙だと感じてみると、お絹の心が穏やかではありません。能登守の奥方にはまだお目にかかったことはないけれど、能登守がああ通る若くて綺麗な人だから、奥方もまた若くて美しい人に違いないとは誰でも想像されることでもあります。そういうことにはことに敏感なこの女は、あんまり人をばかにしているとこう思いました。お安くない夫婦の間の音信をこのわたしたちに見せつける能登守の仕打を憎いと思いました。能登守のような若い殿様に可愛がられる奥方は、どんな人か面が見てやりたいように思いました。自分たちにそういう心を起させようがために、お松に頼まないでもよい手紙をワザと持たしてよこして、これ見よがしに見せびらかすのではないか。

これは能登守にとつては非常に迷惑な邪推であります。

「よしよし、そういうわけならばこの手紙の中を見てやりましょう。どんな憎らしいことが書いてあるか見てやりましょう、ほんとに癢に触るから見てやりましょう」

お絹もそれほど悪い女ではないけれど、情事にかけると、いつも好奇心がいたずらをします。そのいたずらが、暗い中でうごめき出すのを抑えきれないという悪い癖が

ありました。

それでも女のこと、荒らかに封を切るということはなく、楊枝の先で克明に封じ目をほどいて、手紙の中の文言を読んでみると、それがいいいい感じを起させてしまいました。

この手紙の中は夫婦間の美しい消息を以て満たされている。遠く旅に行く夫の心と、病んで家に残る妻の心との床しい思いやりが溢れています。その美しい消息と床しい思いやりとが、お絹の心持をさんざんに悪くしてしまいました。

人の手紙というものは、見るべきものでも見せるべきものでもないのに、それを盗んで見るということはこの上もない卑劣なことで、お絹もそこまで墮落した女ではなかったのだけれど、好奇から出立して、我を失うようになるのは浅ましいことであります。

その手紙を読んでしまったあとでお絹は、ついにその筆蹟をうつすというところまで進んで来ました。駒井能登守の筆蹟を透きうつしにして取ってしまいました。これはどういうつもりか知らん。さすがにそれからあとを破りもしなければ裂きもしないで、もとのように丁寧に封をします。

好奇の隣りには、いつでも罪悪が住んでいる。物を弄ばうと思えば必ず己れが弄ばれる。お絹は悪い計画をする女ではないにかかわらず、男を見るとこういういたずらが起って、兵馬を口説いてみたり、竜之助の時の留女に出てみたり、がんりきを調戯ったりしていた

のが、ここへ来ると駒井能登守を、また相手にする氣になつてしまいました。

能登守の手紙を見てしまったことが何か能登守の弱点を押えたように思われて、その取つておいた筆蹟から、或いは能登守を困らせてやるようないたずらができまいものでもあるまいと思つていました。

「友さん、友さん」

お絹は次の間に控えている米友を呼びましたけれども返事がありませんから、

「どうしたんだろう、疲れて寝込んでしまったのかしら」と独言^{ひとりごと}を言つてゐる時に、与力同心の部屋に宛^あてられたところで哄^{どう}と人の笑う声がしました。それと共に、

「笑っちゃいけねえ」

という声は米友の声であります。

「もうお役人衆の傍へ行つて話し込んでゐると見える。

罪のない人だけれど、また間違いを起さなければよいが」大勢を相手にしきりに話し込んでゐる米友を呼び出すも氣の毒だと思つて、お絹は自分でその手紙を主人のところへ持つて行こうとして廊下へ出ました。

お絹が廊下へ出て見ると、あの部屋の障子には幾多の侍の頭と米友の頭がうつつて見えます。障子に映つてさえ米友の頭はおかしい頭でありました。よくあの頭で人中へ出られるものだ、せめて頭巾でも被つて出るか、そうでなければ、かなり頭の毛が生え揃^{そろ}うまで人中へ出ないようにしていたらよからうにと思ひました。ところが米友はいっこう平氣で、

「一生稽古したつて駄目な奴は駄目なんだ、俺^{わい}らなんぞは木下流の槍の手筋を三日しか稽古しねえんだ、木下流とも言へば淡路流とも言ふんだ、三日稽古をしてその秘伝^{ひでん}をすっかり吞込んでしまったんだ」

何を言つてゐるのかと思へば、槍の自慢でありました。与力同心の連中へ、坊主頭を振り立てて、槍の自慢をしていることがありありとわかります。

与力同心の連中は、一人の米友を真中へ取りまいて、いずれも面白半分な面^{かお}をしてその話を聞いているところであります。

面白半分な面をして聞いているのはまだ真面目^{まじめ}な方で、米友がこの部屋へ入つて来る早々から笑いこけて、いまだにゲラゲラ笑つてゐるものもあります。もう腹の皮を痛くしてしまつて、このうえ笑えないで苦しがつてゐるようなものもあります。

これは米友が好んでここへ押しかけて来たものではありません。彼等は早くもこの宿へ米友が来たということを知つて、相当の礼を以て招いたから米友はここへ来たのであります。

与力同心は、米友の頭を見て笑つてやろうといふような心で米友を招いたのではなく、この不思議な人物の持つてゐる、不思議な能力を解決してみたいからであります。

しかしながら、招かれて来た米友の頭を見た時は哄^{どう}と笑つてしまいました。人を招いておきながら、その人の入つて来るのを見て、声を合せて笑い出すということは

礼儀ではありませんけれども、つい笑ってしまいました。しかし笑われても米友は必ずしも腹を立てませんでした。

「笑っちゃいけない」

と言つて座に着いてから、やがて話が槍のことまで及んで来て、

「一生稽古したつて駄目な奴は駄目なんだ、俺らなんぞは木下流の槍の手筋を三日しか稽古しねえんだ、木下流とも言えば淡路流とも言うんだ、三日稽古をしてその秘伝をすっかり吞込んでしまったんだ」という氣焰を上げています。

七

お絹が手紙を持ち扱い、米友が与力同心の中で氣焰を吐いている間に、お松は風呂場で駒井能登守の世話をしておりました。

お松は次の間に控えて、能登守の風呂から上るのを待っています。

その間に兵馬のことを考えています。いま甲府の牢内に囚とらわれていという兵馬を助けんがためには、神尾主膳に頼ることが最良の道であることに七兵衛もお絹も一致しているが、お松には神尾の殿様という人が、それほど頼みになる人とは思われません。ここにおいでなさる駒井能登守という殿様は、神尾の殿様よりも一層頼みになりそうな殿様であると、こう思わないわけにはゆきま

せん。甲府勤番支配は、ある意味において、甲州の国主大名と同じことだと言つてお絹から聞かされました。神尾の殿様に比べて強大な権力を持っている人だということもお絹から聞かされました。その上に、ちよつとお目にかかっただけでも、大層お優しい方だとお松は頼もしく思いました。神尾の殿様とは、以前の知行高は同じぐらいであつたそうだけれども、その人品は大へんな相違があると思ひました。それですから、もし神尾の殿様に願つて通らなかつた時は、この殿様に願えば必ず叶かなえて下さるだろうと思われてなりません。或いは神尾の殿様に願わない前に、この殿様にお願ひした方が、事がすんなりと運ぶだろうと、お松はそこまで考えてきました。それでこの殿様に、この意味で取入つておくことが幸いであると気がつきました。お絹がお松をして能登守に取入らせようという心と、お松が自身で能登守を頼ろうとする心とは全く別なのであります。

そう考えてくると、お松はこの時が好い機会であると思ひないわけにもゆきませんでした。同じ甲府へ行く旅にしても、身分も違えば目的も違う、この後、こんなに親しくお目にかかれる機会があるかどうかわからぬとお松はそこへ気がついたから、どうしても今宵こよひを過ごさず能登守に向つて、兵馬の身の上のお願いをしてみるほかはないと、心が少しいらだつようになりました。

こんなことを考えている時に、能登守は風呂から上つた様子でありましたから、お松は立つて行きました。そうしてお松は、能登守の着物を着替える世話をしやり

ました。能登守はお松の親切を喜んで、打解けて見えません。

お松は言い出そう、言い出そうとしましたけれども、つい言い出しにくくなって、お願いがございまずと咽喉まで出てそれが言えないで、自分ながら気がいらだつのみであります。

お松が能登守のために雪洞ばんぼりを捧げて長い廊下を渡って行く時に、笹子峠の上へ鎌のような月がかかっているのが見えました。

能登守は静かに廊下を歩きながら、その月を振仰いで見ました。

「そなたは、江戸からこんなところへ来て淋しいとは思わないか」

と能登守はお松を顧かえりみてこう言ってくれました。その言葉があったために、さっきから一生懸命で、言い出そうとしていたお松は一時に力を得て、

「いいえ、淋しいとは思いません、少しも」

と言葉にも力を入れて返事をしました。

「それはえらい」

と言って、能登守は賞ほめたけれども、お松の言葉よりは鎌のような月の方に見み惚とれているのでありました。

「殿様」

お松はここでせいっぱいに殿様といって能登守を呼びかけましたけれど、自分ながらその言葉の顫ふるえていることに驚いたくらいでありました。

「なに？」

能登守は、お松の改まった様子を少しく気に留めた様子です。

「あの、お願いでござりまする」

とお松は、いよいよ改まった言葉でありました。

「願いととは？」

能登守は鎌のような月を見ていた眼を、お松の方へ向けました。そうして雪洞ばんぼりの光に照らされたお松の面かおに一生懸命の色が映っていることを認めて、これには仔細があるだろうと感じました。

「あの、わたくしどもが甲府へ参りまするのは、冤むじつの罪で牢屋につながれている人を助けに参るのでござります」

「人を助けに？」

「それ故、殿様のお力添えをお願い致したいのでござりまする」

お松は夢中になってここまで言っていました。ここまで言ってしまうと、ホッと息をつきました。

「果して冤むじつの罪であるものならば、わしの力を借りるまでもなく罪は赦ゆるされる。もし、まことに罪があるものならば、わしが力添えをしたとてどうにもなるものではない」

と能登守は、お松の願いの筋には深く触れないで、やや慰め面がほにこう言っただけでした。しかしお松はもう、一旦切り出した勇気がついたから、その頼みの綱はしを外はずすようなことはしません。

「いいえ、たしかに冤^{むじつ}の罪なのでございまする、その方は決して盗みなどをなさる方ではないのでございまする、公儀様の御金蔵を破るなどという、だいそれたことをなさるお方でないことは、わたしが命にかけてもお願い^{うけあい}を致しまする、それがあらぬお疑いのためにただいま御牢内に繋^{つな}がれておいであそばす故、わたくしは心配でなりませぬ、何卒してそのお方をお助け申し上げたいと、それでわたくしどもは甲府へ参りますのでござりまする、甲府へ参りまして、神尾主膳様からそのお願いを致すつもりでございますが……」

お松は一息にこれだけを言ってしまった。能登守は、お松の願うほど熱心にそれを聞いたのか聞かないのか知らないけれど、笹子峠の上にかかった鎌のような月にばかり見慌れているのであります。

そのうちに廊下を渡り^{おわ}了って、能登守の居間の近くまで来ました。

八

お松が帰って来た時分に、お絹のいなかったことは別に怪しいことではありません。

お絹は風呂から出ると、浴衣^{ゆかた}を引っかけてままで暫く溪流に臨んで湯上りの肌を、山岳の空気に打たせていました。

前にいう通り、すぐ眼の上なる笹子峠には鎌のような月がかかっている。四方の山は桶^{おけ}を立てたようで、桂川

へ落ちる笹川の溪流が涼々^{そうそう}として縁の下を流れていきます。

自分にいい寄って来る男を物の数とも思わないような気位が、年と共に薄らいでゆくことが、自分ながらよくよくわかります。それ故にがんりきとお角とが仲よくして歩くところを見ると嫉^あけて仕方がありませんでした。

有体^{ありてい}に言えば今のお絹は、男が欲しくて欲しくてたまらないのであります。男でさえあれば、どんな男でも相手にするといふほどに荒^{すさ}んでくることが、このごろでもたえず起って来るようでありました。

「あの、がんりきの百蔵という男、御苦労さまにわたしたちを付け覗^{ねら}ってこの甲州へ追蒐^{おっか}けて来たが、あの猿橋で、土地の親分とやうに捉^{とら}まって酷い目にあったそう、ほんとにお気の毒な話」

とお絹は、がんりきのことと、それが猿橋へ吊されたという話を思い出して、ほほ笑み、

「七兵衛が助けると言って出かけたが、ほんとに助かったか知ら。酔興とは言いながら、かわいそうのような心持がする、何のつもりか知らないけれど、わたしを追蒐^{おっか}けて来たと思えば、あんな男でもまんざら憎くはない、命がけで、わたしの後を追蒐^{おっか}けて来る心持が可愛い」

今となつては、たとえ無頼漢^{なうずもの}であろうとも、自分に調戯^{からか}ってくれる男のないことが淋しいくらいでありました。

こんなことをいつまで考えていても際限がないと、お絹は浴衣の襟をつくろってそこを立とうとした時に、縁

の下の笹藪^{ささやぶ}がガサと動いて、幽霊のようなものが谷川の中から、煙のように舞い出した。あれと驚くまもなくお絹の首筋をすーっと一巻き捲いてしまいました。

「何を……何をなさるの……」

その幽霊のようなものは、お絹の首筋をすーッと捲いて、その面^{かほ}を自分の胸のあたりへ厳しく締めつけたものだから、それでお絹は、言葉を出すことができなくなっていました。

「御新造^{ごしんぞう}、がんりきだ、百だよ」

と言って、有無^{うむ}を言わず縁の下へ引き下ろしてしまいました。

河童^{かっぱ}に浚^{さら}われるというのは、ちょうどこんなのだろうと思われます。お絹は一言^{ひとこと}も物を言う隙^{ひま}さえなく、欄^{てすり}の上から川の岸の笹藪の中へ、何者とも知れないものに抱き込まれてしまいました。何物とも知れないのではない、その者はお絹の首を抱いてその面をしつかりと胸に当て、口の利けないようにしておいてから、「おれは、がんりきだ、百蔵だ」と名乗ったはずです。

本陣の方では、こんなことを気のついたものが一人もありませんでした。

能登守は事務に精励であつたし、米友は与力同心を相手に気焰を吐いているし、そのほかの連中とてもそれぞれの仕事をしていたり、世間話をしていたりしていました。のだから、一向この方面のことは閑却されていきました。ただ一人お松だけが、お絹の湯上りがあんまり悠長^{ゆうちやう}なのを気にして、二度までも湯殿へ来て見ましたけれど、

そこにも姿を見ることができませんでしたから、ようやく気が揉^もめ出して米友を呼んでみようと思いましたが、でも、その米友は、相変らず与力同心を相手に槍の気焰を吐いて夢中になっているようですから、気の毒のような心持がして、それで、また三度まで廊下の方へ行ってみました。

お松が廊下を通った時に、廊下の縁の闇の中から、

「お松」

「はい」

自分を呼んだのは、たしかに七兵衛の声です。

「お師匠さんはいるか」

「今、お風呂に……」

「風呂ではあるまい、風呂にはいないはずだ」

「ええ、今ちよつとどこへか……」

「それ見ろ」

七兵衛から、それ見ろと言われてお松はギョツとしました。

「友さん呼びましょう、御支配のお役人様もおいでなさいますから、お頼み申しませうか」

こういつてあわてると、七兵衛はそれを押えて、

「米友にも役人にも知らせない方がいい、ナニ、百の野郎は痛み所で、身動きも碌^{ろく}にできねえのだから、大したことになりはしめえ、俺がこれから一人で行って捉まえて来る、お前はそのまま座敷へ帰って静かにしているがいい、米友にもやっぱ黙^{もく}っていた方がいいよ、あいつが下手^{へた}に騒ぎ出すとまた事壊^{ことこわ}した」

七兵衛は、これだけのことを言い残して、闇の中へ消えて行きました。

鎌のような月が相変らず笹子峠の七曲^{ななまがり}のあたりにかかっている時に、黒野田の笹川の谷間から道のないところを無理に分け登って行くものがあります。肩に引っかけられた女は少しの抵抗する模様もなく、背中へグツタリと垂れた面へおりおり木の繁みを洩れた月の光が触ると、蟬のように蒼白く、死んだものごしか見えません。それを背中へ載せて路のないところを登って行くがんりきの百蔵。これもまた面の色が真蒼^{まそう}で、ほとんど生ける色はありません。木の根に助けられたり、岩の角に支えられたりして、上るには上るが、その息の切り方が今にも絶え入りそうで、やっと一丁も登ったかと思う時分に、力にした草の根が抜けると一堪^{ひとたま}りもなく転々と下へ落ちました。

「ああ、苦しい」

二三間も下へ落ちて岩の出たところで支えられた時に、がんりきは、もう苦しくて苦しくてたまらなく見えませんでしたけれど、その肩へ引っかけていたお絹の手首は決して放すことではありません。

はッ、はッと吐く息は唐箕^{とうみ}の風のようにあります。なんにしても、がんりきは腕が一本しかないのです。その一本しかない腕で、お絹を肩に担いで、足と身体で調子を取って上ろうとする心だけが逸^はつて、岩に足を踏掛けると足がツリと^{すべ}りしました。

「あっ、苦しい」

またも二間ばかり下へ^ひり落ちたがんりきは、お絹と共に折重^{せしむ}なって、暫らくは起き上げられません。

「あっ、苦しくてたまらねえ」
やっと起き直って見ると、向う脛^{むね}からダラダラと血が流れていました。

「畜生、こんなに向う脛を摺^{すり}剥^むいてしまった」

そのままにしてお絹を引っかけて、また上りはじめてまた^ひりました。

「こいつはいけねえ、いくら力を入れても^ひって上れねえ、はッ、はッ」

やっと一間も登ると、ズルズルと七尺も^ひっては落ちる。

「こんなことをしていたんじゃあ始まらねえ、帯はねえか、帯は」

ここに^{おぼつか}至^{いた}ってがんりきは、とても手首を掴まえて肩にかけて上ることの覚束^{おぼつか}ないのを悟ったから、帯を求めて背中へ括^くりつけて登りにかかうと気がついて、はじめて手首を放して大事そうにお絹の身体を岩蔭に置きました。

「死んでいるんじゃねえ、殺したと思うと違うんだよ、もう少し辛抱すりゃ活^{いか}して上げますぜ御新造、はッ、はッ」

例の鎌のような月が、微かながらその光を差して、真白なお絹の面と肌とが活きて動くように見え出した時、がんりきはどこかで大木の唸^{うな}るような音を聞きました。

猫が鼠を捕った時は、暫らくそれをおもちゃにしてい

るように、自分でそこへ抛り出したお絹の面を見ると、
がんりきは物狂わしい心持で、

「こうしちやいらねえんだ」

再びお絹を背負い上げて登りはじめようとしたが、この時はがんりきの身体もほとんど疲労困憊の極に達して、自分一人でさえ自分の身が持ち切れなくなっていました。この女を荷ってこの崖路を登ることはおろか、立って見つめているうちに、眼がクラクラとして、足がフラフラとして、どうにも持ち切れなくなつたから、がんりきはお絹の傍へ打倒れるようにして、烈しい吐息を、はっはっとなきながら峠の上を仰いで、

「矢立の杉が唸っていやがる、矢立の杉が唸ると山に碌なことはねえんだ。せめて、あの杉のところまで行きたかつたんだが、この分じゃあもう一足も歩けねえ、いつてこれから下へも降りられねえ、自分ながら自分の身体が始末にいけないんだからじれつてえな。うまくせしめるにはせしめたけれど、これだけじゃあ何にもならねえや。俺の腕はこんなもんだということを、七の兄貴にも見せてやりてえし、糸の親分にも見せてやりてえんだ。それからまた、勤番の御支配とやらが泊っている本陣から盗み出したといえ、ずいぶん幅が利かねえものでもねえ、これからこの女を連れて一足先に駒飼まで行って、そこで、どんなものだと思んなの面を見てやりやあ、後はどうなつたって虫がいらあ。峠を越してしまわねえうちは、こつちのもんでこつちのものでねえようなものだから、なんとかして漕ぎつけてえんだが、身体が利かね

えから仕方がねえ。ああ、ほんとに弱つた、死んでしめえそうだわい」

がんりきはいよいよそこへ、へたばつて動けなくなりました。

がんりきが動けなくなつた時分に、お絹が少しく動き出してきました。お絹が少し動き出した時分に、下の方で喧ましい人の声、上の方でもまた人の声。

昏倒しかけたがんりきは、お絹の動いたことにはまだ気がつかなくなつたけれど、上下で起るその人の声は早くも耳に入ると、必死の力でむっくり起き直つて見ると、提灯の光が、いくつもいくつも黒野田の方から、谷川と崖路を伝うてこちらを差して来るのがわかります。

上の方、矢立の杉のあたりからもまた火影がチラチラ、してみると自分はもう取捲かれてゐるのだ。がんりきは遽に立ち上つてよろめきながら、

「トテモ逃げられなけりや、ここで心中だ。生きて峠が越えられねえのだから、死んで三途の川を渡るのも、乙な因縁だらうじゃねえか。道行の相手に、まあこのくらの女なら俺の身上では大した不足もあるめえ。猿橋の裏を中ぶらりんで見せられたり、笹子峠から一足飛びに地獄の道行なんぞは、あんまり洒落すぎて感心もしねえのだが、どうもこうなつちやあ仕方がねえ」

がんりきがお絹の傍へ寄つた時、

「な、何をするの」

お絹は生きていました。自分の咽喉へかけようとしたがんりきの手を、夢中で振り払うと、

「おや」

が、んりきも驚いたが、その途端にフラフラとまたしても岩を^{すべ}ると、あわててその片手にお絹の着物の裾を掴む。裾を掴んだけれども、^{つるべおと}迂る勢いが強くてお絹もろとも釣瓶落しに谷底へ落っこちます。

九

その翌朝、駒井能登守の一行は例によってこの本陣を出立しました。お絹、お松、米友の一行は、それに従って行く様子がありません。

昨夜、七兵衛はお松にことわって誰にも言うなと言ったにかかわらず、お松はそれを黙っているわけにはゆかないから、与力同心を相手に気焰を揚げていた米友を呼んで話しました。それから騒ぎが大きくなって、居合わすもの総出の勢で、山狩りをして峠の方へ狩り立てて行くうちに、尋ねるお絹が半死半生の体で谷間から這い出して来ました。

ともかくも、お絹が逃げて来たことによって、一同も安心して宿へ引取ったが、お絹は一切のことを語りません。それ故に誰もその事情を知るものがなく、或いは山の天狗に^{さら}浚われたのではないかと思っています。

無事で逃げて帰ることのできたお絹は、実は能登守の一行について行きたかったのだけれども、身体が弱っているから、心ならずもここに留まることになりました。かくて駒井能登守の一行が黒野田を出ると、幾力所の

橋を渡り、追分を通過して、いよいよ笹子峠へかかりました。

「これが笹子峠の矢立の杉」

中の茶屋を通過して、矢立の杉の下で一行が立ち止まってその杉を見上げました。

「ははあ、矢立の杉というのはこれか」

と言って杉のまわりをまわり歩いている連中が、面白半分に手を合せてその杉の大きさを抱えてみました。

「ちょうど七^{ななか}抱え半ある」

「昔の歌に、武夫の手向の^{ものふ}征箭も跡ふりて神寂び立てる杉の一もと、とあるのはこの杉だ」

「ナニ、なんと言われる、その歌をもう一度」

と言って、写生帖を持っていたのが念を押しました。

「武夫の手向の征箭も跡ふりて神寂び立てる杉の一もと」
「なるほど」

写生帖へその歌を書き込んで、

「読人は」
^{よみびと}

「読人知らず」

「年代はいつごろ」

「これも知らぬ」

「ははあ、よく歌だけを記憶しておられた、感心なこと」と言って写生帖が感心すると、古歌の通^{つう}が笑って、

「この石に^{きざ}刻んであるからそれで知ったのだ」

「ははあ、石碑の受売りか。その石碑もまた相当に古色があつて面白い、年代はいつごろだろうか知ら」

「よく年代を知りたがる人じゃ」

「ええ、明暦めいれきとある、肝腎かんじんの年号の数字のところが欠けていて見えない、明暦も元年から始まって三年までである、厳有院げんいういん様の時代であって、左様、今から考えると、ざっと二百年の星霜を経ている」

「してみると、その歌もその時代に詠よまれたものであらう」

「いや、もっと調子が古いわい、江戸時代の産物ではない。いったいこの笹子山は一名坂東山ばんとうやまといって、古来、関東で名のある山、日本武尊やまとたけるのみこと以来の歴史がある」

「なるほど、してみるとその歌は、日本武尊がお詠みなされたお歌ではないか」

「違ちがう、日本武尊時代にはこんな和歌は流行はやらなかった」杉の根もとで勝手な考証を試みています。

「古来、この道を軍勢が通る時は必ずこの杉に矢を射立てて、山の神に手向けたむけをして通るならわしになっていた」
「我々もその古例を追うて、弓矢の手向けをして行こうではないか」

「我々のは、甲州を治めに行くので、征伐に行くのとは違ちがう、それ故、弓矢の手向けをするにも及およぶまい」

「天文十六年の事、原美濃守がこの関所を千貫に積ちぎって知行ちぎょうしている、もし武田勝頼が天目山で討死をせず、東へ下ったものとすれば、この峠が第一の要害になったのであらうけれど、このことなくして止んだから、この峠に軍勢を上せたことは、まず近代にはないようである。
小田原北条の一族、左衛門太夫氏勝うじかつが八千余騎でここに

陣取って足輕を駒飼まで進めたこと、これが近ごろの記録であるようじゃ」

「よくお調べでござるな」

「それから昨夜、土地の人に就いて聞けば、山に何か異変が起る時は、この杉が唸うなるといふことじゃ」

「杉が唸るといふのも、おかしいことであるけれど、風でも吹けばこれほどの大木ゆえ、じっとして黙ってはいまい」

「それから時々、この杉の頂辺てうぺんへ天狗が来て巢を食い、おりおり下界から人を浚さらって来てこの杉の枝へ突っかけて置くといふことじゃ」

「ははあ、天狗が留るか。なるほど、木もこのくらい大きくなれば、いかさま天狗が住めそうじゃ。それといえ、昨夜あの婦人、あれがもしやその天狗に浚さらわれたのではないか」

「なるほど、よいところへこじつけたものだ。或いはその天狗がまだ一人二人の婦人を浚さらって、この杉の枝へ掛けて置くやも知れぬ、よく調べてみるがよい」

「しかし……また婦人の挙動は、あれは考えものだな」

杉の考証と伝説は転じて、昨夜のお絹の挙動及びその行方のことになりました。

お絹が一切を語らなかつたから、これらの人々も何と判断のつけようがなく、結局この矢立の杉あたりに棲すむ天狗の仕業しわざという里人の迷信を打消しめせずに出て来たものでありました。けれども、ここで考え直してみれば、どうしても解げせぬことであります。

「さてこの道中は、いろいろな珍らしいことに^{でつくわ}出会す。

顧みて数えると、まず駒木野の関所であの女、次に小仏峠で足の早い奴、それから鶴川では槍をよく使う^{こひよう}小兵の男、それから猿橋へ来て橋へ吊されたものが前の足の早い奴で、また片手の無い奴、それを捉まえてみるとその夜のうちに消えてなくなる」

「それらと考えると、昨夜の婦人の挙動、それから前のいろいろの珍事にいちいち糸が引いてあるようにも思われる、もしあの片手のない奴が、昨夜の婦人を浚って逃げたのではないかとも思われる、そうだとすれば婦人が一人で帰ったのがおかしいけれど、あの片手の無い奴はこのあたりの山に隠れているかも知れぬ」

猿橋の問屋で逃げられたが^{ふけ}んりきのこと、もしやこの道中のいずれにかと、雑談に耽^{ふけ}りながら左右に眼を配りつつ進んで行ったが、笹子峠の七曲りというのへ来た時分に、

「あれあれ、あの谷川で水を飲んでいる者があるぞ」

駒井能登守が谷底を望んでこう言いましたから、一同はみんな谷底をのぞいて見ました。

駒井能登守が水を飲んでいたものを見かけたのは、峠が下りになってから五六丁のところ、そこは俗に^{ぼうずさわ}坊主沢といって橋の^{さんどう}棧道がいくつもかかっている、下には清流が^{こんこん}滾々と流れているところです。能登守が、そこで水を飲んでいる何者かを見かけて声をかけた時は、その者は^{いたち}鼬のように山の中へ駈込んでしまいました。

その駈込んだところを誰もチラと見たものですから、

それと言ってバラバラと追いかけます。

それからの一行は、写生帖も史蹟の話もなくその怪しい者を捕えるべく、前後左右から遠網にかけるようにして、峠を下りついたところが駒飼^{こまかい}の宿であります。

駒井能登守の一行がこの怪しの者を、駒飼の宿に近いところまで追い卸^{おろ}した時分に、それとは逆に甲州街道を、鶴^{つる}瀬^せから本陣の土屋清左衛門の許を立て、お関所を越えて駒飼の方へ行く一行がありました。これも槍を立て数人の供を引きつれて東に下るものと見えました。これは供^{ともぞろ}揃いはさほどでなかったけれど、乗物を三つも並べたところが物々しい。その三つの乗物のうちの一つには人がいたけれど、あとの二つは空^{から}でありました。その一つに乗っている人というのは神尾主膳でありました。してみれば、明いている二つの乗物の用向も大抵わかる。主膳は遊山がてらにお絹お松の一行を迎えに来たものと見てよろしい。実は笹子峠のこちらまで迎えるつもりであつたのを、どうしてもこの峠を越し^{おおば}大庭まで行かなければならなかった事情が出来たものであります。

「殿様」

「何だ」

「あれが天目山の道でござりまするな」

「左様」

「必ず天目山へ上ってみると仰せでございましたが、どうしてまた急にお模様替えなのでござりまする」

「昨夜、急用が出来た故、山のぼりなどをしてはおれぬ」

「急用と申しますのは？」

「黒野田の宿で、何か変事が出来たということじゃ」

「へえ、あのお絹様と、それからお松どのとが何か難儀にお遭いなされましたか」

「左様」

「それは大変でござりまする。してその難儀と申しまするのは？」

「くわしいことはわからぬが、盗賊か胡麻の蠅に過ぎまいと思う」

「それはまことに心がかりでござりまする」

「とにかく、黒野田へ行って見ての上でないと拙者にもわからぬ。それから滝田、この道中、ことによると駒井能登守という旗本と出逢うかも知れぬ、それはこのたび、甲府へお役になった拙者の知合いだ、たぶん我々が峠へ登る時分に、駒井は下りて来るだろうから、やがて行逢った時は、乗物を下りて名乗り合うのはこと面倒だから、知らぬ面をして通れ」

「畏まりました」

「なるべくならば神尾主膳と名乗りたくない、尋ねたならば、諏訪の家中で江戸へ下るとでも申しておいたがよろしかろう」

「畏まりました」

こうして神尾主膳の一行が関所を出て橋を渡って休所の、すしや重兵衛の前を通って駒飼へと進んで行きました。

その時は、まだ早朝のことでありました。神尾主膳の一行が駒飼の宿から出て、いよいよ笹子峠の上りにかか

ろうとする時分に、不意に傍なる林の中から人が飛び出して、主膳の駕籠わきに転がってしまいました。

「何者だ」

「といって家来の連中が立ち塞がると、

「どうかお助けなすっておくんなさいまし、どなた様かは存じませぬが、九死一生の場合でございます、お見かけ申してお願ひ申すんでございます、どうかお助けなすって下さいまし」

駕籠の傍へ手をついたのは、なるほど、九死一生と見えて髪は乱れ、白い着物は裂け、身体じゅう突傷だの擦傷だので惨憺たるもので、その上に右の片腕が一本無い男であります。

「次第によつては助けてやるまいものでもないが、其方は何者だ、どうして斯様なことになった」

「身延山へ参詣する者でございます、途中で悪い奴に遭つてこんな目に逢わされてしまいました、お話し申せば長いことでございます、ここではお話が申し上げられませんが。あれ、いま追手がかかります、追手というのはお役人でございます、お役人が間違えて、私を悪者だと思つて捉まえて来るんでございます、今お役人につかまつては、私も言い解くことができませんから、どうか暫らくおかくまいなすって下さいまし、そのうちにキツと私の罪のないことがわかるんでございます、同じことならあのお役人に捉まりたくないんでございます」

「はて、其方を追いかける役人というのは？」

「今、向うからやって参ります、今度、江戸表からお越

しになった駒井能登守様というお役人の御人数でございます、あのお方に捉まると私が是が非でも悪者にされてしまいますから、どうかお助けなすっておくんなさいまし、もうこの通り身体が弱っていますから、一足も動けませんでございます」

「なるほど、其方を追いかけて来たのは、駒井能登守の人数であると申すな」

「左様でございます、あれもう、ああやって追いかけて参ります」

「殿様、お聞きの通りの次第、いかが取計らったものでござりましょう」

「よし、助けてやれ」

「では能登守様から故障がありました節は、いかが取計らいましょう」

「拙者が引受けるからよろしい」

神尾主膳は一諾してしまいました。怪しい奴は弱りきっていたにかかわらず、この一諾を聞いて躍り上るほどに喜んで、

「有難うござりまする、この御恩は死んでも忘れは致しませぬ」

神尾の駕籠を拝みます。神尾はそれを見て、

「どこの何者か知らんが、危急と見受ける故、ともかくも一応助けて取らせる。滝田、幸い駕籠が二つ空いている、それへこの者を載せてやれ」

「畏まりました。これ、殿様がお助け下された上に、この乗物をお貸し下さる、有難く心得ての中へ入れ」

「何から何まで有難うございます、それでは御遠慮なしに、お言葉に甘えまして、どうか御免下さいまし」

お絹を乗せてつれて帰るべき乗物へ、怪しい奴を乗せてやりました。怪しい奴はすなわちがんりきの百蔵であります。

そうしておいて神尾は、

「もし能登守の手の者が何とか尋ねても、知らぬ存ぜぬと言つてしまえ、むつかしくなれば拙者が応対に出る、其方たちは取合わずに乗物を進めろ」

果していくばくもなく、神尾主膳の一行の前にバラバラと駆けて来たのは、駒井能登守の手の与力同心とお手先の者共でありました。

「失礼ながらそのお乗物、暫らくお待ち下されたい」

「何の御用でござる」

「ただいま、一人の怪しき者を追い込んで参りましたところ、この辺にて姿を見失い申した、もしやお見かけはござらぬか」

「とんとお見受け申さぬ」

「はて」

と言つて能登守の手の者は、挨拶に出た主膳の家来どもを怪訝な眼でながめ、

「ただいま、このところでしたしかにその者の姿を見かけたものがござるが」

「我々の方においては左様な者を一向に見かけ申さぬ」

「年の頃は三十ぐらい、色が白く、小作り、もとは江戸の髪結職であつた者、それに誰が眼にも著しいのは左

の片腕が無いこと」

「ははあ」

「怪しい廉が多い故、いちおう取押えて置きたい」

「それは御苦労千万。しておのおの方は？」

「我々は、このたび甲府勤番支配を承った駒井能登守の手の者、甲府へ赴任の道すがらでござるが」

「しからは、これより峠を登り行くうち、まंनीち左様なものに出逢い申さぬとも限らぬ、その折は取押えてお引渡しを致すでござろう、これにて御免」

これにはかまわずに、乗物を進めようとするから、能登守の手の同心と手先はあわててその前に立ち塞がるようにして、

「あいや、お暇は取らせぬ、暫時お待ち下されたい。して御貴殿方はどなたでござるか、お名乗りを承りたい」

こう言つて能登守の手の者が、神尾の駕籠先を押えるようにしました。ここに至ってドチラにも多少の意地ずくが見えました。

「おのおの方にお名乗り申す由はない。たつて姓名が承りたくば能登守直々においであるがよろしい」

と神尾の者がこう言いました。

この時に、駒井能登守と渡辺という与力が、峠を下りて近いところまでやって来ました。

それと聞いて渡辺は神尾の駕籠近く寄つて来て、

「お乗物の中へ物申す、拙者は甲府勤番支配の与力渡辺三次郎、失礼ながらお名乗りを承りたい」

この時に神尾主膳が駕籠の垂を上げて外を見ると、お

りから来かかった駒井能登守と面を合わせたが、さあらぬ体で、

「拙者事は、同じく甲府勤番の組頭神尾主膳でござる、今日は私用にてこのところを通行致す故、公用向きの礼儀は後日に譲る、お尋ねの怪しい者とやら一向に我等は存知致さぬ、前路にちと急の用事あるにより、これにて御免」

こう言つたままで、垂を下ろさせてさつさと駕籠を進ませました。だから能登守の左右の者が、その無礼を憤って眼と眼を見合わせると、能登守はなにげなき風情で取合いません。

十

こうして神尾主膳の一行は笹子峠を向うへ越えて、黒野田の本陣へ着きました。

黒野田の本陣へ神尾の一行が着いた分には仔細がないけれど、その一つの駕籠の中に隠して来たがんりきをこの宿へ連れ込むとすれば無事ではないはずだが、一行がこの本陣の前へ着いた時に、がんりきの駕籠だけはここへ留めないで、「鳥沢まで送つてやれ」ということになったのは、思うにまたしてもその鳥沢の条という親分のところまで送り返されるものであらうと思われる。

がんりきだけを鳥沢へ送りとどけて、神尾の一行が、この本陣へ着いた時に、本陣では前の晩に能登守を泊めたと同じぐらいのもてなしをせねばなりません。

そうしてそれぞれ失礼のないようにお迎え申したけれど、ここに奇怪なのはお絹の素振りでありました。この時、お絹はもう昨夜の災難のことなどは、ケロリと忘れてしまっているようでした。朝寝を少し永くしたぐらいのところで、主膳を迎うべく薄化粧などをして、主膳が着くと、真先に立って下へも置かぬもてなしが、何も知らぬ本陣の人々には別段おかしくもなかったろうけれど、前後を知っているお松には、あんまりそらぞらしいように思われてなりませんでした。

なぜならば、駒井能登守をもてなす時は、神尾の殿様などは有つても無くつてもいいような口振をして見せたのに、その能登守が去って神尾主膳が来てみると、能登守なんぞはどこを通つたかというようにして、もう一も二も神尾でなければならぬように、そわそわしているからであります。よくもこうまで手のうらを返すようになれるものかと、お松がそれをあまりにそらぞらしく浅ましく思つたのも無理はありません。そのみならず、神尾がここへ着くと共に、早速に酒宴が始まって、お絹が先立ちでその周旋をするという体たらくになつてしまひ、お松が座を外して隠れるようにしていると、神尾主膳は、お絹を相手にして盛んに飲みながら、お前もひとりで貞女暮しは淋しいことだろうとか、殿様も甲府ではまた罪をお作りになつたことでごさいますようにとか、お松か、あれも年頃になつたな、お前の仕込みだから抜かりもあるまいとかいうような言葉を洩れ聞いたお松は、面から火が出るようでありました。

ここに憐むべき宇治山田の米友は、己れの間に閉じ籠つたまま、沈痛な色を漲らせて腕を組んで物思いに耽つています。

米友は、ここまでの道中で二度失敗したことを良心に責められています。

米友が失敗したその一度は、上野原の宿で一行に出し抜かれて、無理な鶴川渡りをしてやっと追いついた事、その二度目は昨夜の騒動であります。

彼は、この道中が終るまでは、寸分の際もなくお絹とお松とを守つておらねばならぬ使命がある。彼自身もまたその使命を粗末にしようとは思つていなかったのに、昨夜という昨夜、与力同心に招かれて槍の話になつて、有頂天に気焰を吐いてしまいました。

その際にお絹が天狗に浚われたのだから、幸いにしてお絹は歸つて来たからいいようなものの、もし歸らなければ、所詮自分の腹切り勝負だと思ひました。とてもここにこうしてはいられぬ、面目のないことだと思ひました。米友は、それ故に良心の呵責を受けています。しかし、米友の単純な心でも、どうもあれからのお絹の挙動が解せない、他の人が騒ぐほどに騒がないお絹の心持がわかりません。髪容や着物のさんざんになつて歸つて来たところを見れば、かなりヒドイ目に遭つて来たのだらうと思われるにもかかわらず、そのヒドイ目に遭わした奴に仕返しをしてやろうという気が更に見えない。仕返しをしてみようという気がないばかりでなく、そのた

めに山狩りをして悪い奴を捉まえようとするのを、よいなことのように見ています。

それよりもなおわからないのは、昨夜あれほどに人騒がせをやった当人であるにかかわらず、今日はもうケロリとしてしまって、甲府から迎えに来たというお武士を引張り上げて、あの通り御機嫌よくもてなしているというところが、正直な米友にとつては忌々しいことです。

あんなとりとまりのない人間を、槍を持って番人に廻っているのがばかばかしいと考えている時に、障子が不意にあきました。見ればやや酒気を帯びたお絹がそこに立って、

「友さん」

「うむ」

「昨夜はどうもお騒がせをしました、あの甲府から神尾主膳様がお迎えにおいで下すつて、お供の衆もたくさんついていきますから、もうこれからは安心、今までお前さんにもいろいろお世話になりましたけれど、これからはもうお前さんの勝手に旅をしてようござんすよ」

「ええ？」

「お前さんは、これから江戸の方へ帰りなされるとも、また甲府の方へ行ってみようと、もうわたしたちにかまわないうで、自分の気儘にしておいでなさい」

「うむ」

「これは少しだけれど、ほんの、わたしたちの志、どうぞ納めておいて下さい。それから、もしお前さんが甲府へ行っても、今までの調子で心安立てに、殿様のお

邸なんぞへ無暗にやって来られては困ることもあるから、そこは遠慮をしておいておくれ、そのうち御縁があればまた何とかして上げないものでもありませんからね」

金一封を包んでそこに置いたまま、眼をパチパチさせて口を吃らせている米友を見返りもしないで、お絹はさつさとこの場を立つて行きました。

お絹の置いていった金一封を前にして米友は、暫く呆然としていたが、やがて冷笑に変わってしまいました。「ばかにしてやがら」

その一封を横の方から突いてみました。突いてみたのはなにも、その中にどのくらい入っているかというのを試したわけではありません。あんまりばかばかしいから、小突き廻してみたのであります。米友は、これらの連中の譜代の家来でもなければ臨時の雇人でもない。甲州へ行こうというのは、必ずしもこの人の附添が目的なのではないのです。これは行きがけの駄賃のようなもので、米友はお君に会いたくてたまらないから、それで甲州へ行く気になったものであります。

この附添は頼んだものでなくて頼まれたものである。いつ断わられたところで敢て痛痒を感じずるわけではないけれど、ここで断わるというのは、あんまり人をばかにした仕打ちであると思いました。それだから米友は、

「勝手にしやがれ」

と言って、またその金一封を小突き廻しました。金一封を小突き廻したところで始まらないのであるが、この場

合、米友の癩癧のやり場としては、どうしても眼の前の金一封が的になります。

「ばかにしてやがら、こんな金なんぞ要らねえ」

米友はいったん、左の方から小突き廻した金一封を、今度は右の方から小突き廻しました。その有様は、掴んで抛り出すのも汚らしいといった手つきであります。

よしよし、これからは一本立ちで甲府へ行つて見せるとも、峠を越せば甲府まで一日で行けるといふことだ、小遣だつて何もそのくらいのことには困りはしない、こんな金なんぞ要るものか、突返しに行くのも、あの女の面を見るのが癪だから、と言つて置放しにして行けば、誰か取つてしまった時に米友が持つて出たと思われるのが業腹だと米友は、眼の前の金一封を睨めながら、腹を立てたり始末に困つたりしていましたが、結局庭へ抛り出してしまふのがいちばんよろしいと考えました。庭へ抛り出して撒き散らかして置けば、人の目に触れて、自分が持つて出なかつた証拠が立つと思ひました。米友はその金一封を掴んで、ゲジゲジでも取つて捨てるような手つきで持ち出して、障子をあけてポンと庭の方へ、それもお絹の部屋の方へ近く、なるたけ人の眼に触れるようなところへと思つて投げ出しました。

米友に投げられた金一封は、庭の松の木の幹に當つてコツンと音がしましたけれど、かなり固く封がしてあつたと見えて、そのまま転がってしまったから、とても、梅忠がやったような花々しい光景にはなりません。

「ちえッ」

米友は舌打ちをしてその抛り出した金一封を尻目にかけながら、自分は手荷物と例の手槍と脚絆なんぞを掻き集めて、旅の仕度にとりかかります。

旅の仕度が出来上つて、いざと米友は縁へ出ましたけれど、いま投げ出した金一封が、封のままでゴロリとそこに転がっているのが眼ざわりでたまりません。

米友の氣象として、決してその金一封に未練があるのなんのというのではないけれど、ああして置いて誰にも見られないでほかの人に拾われてしまつては、結局やはり、自分が持つて逃げたように思われてしまふのが心外であるから、松の根方に転がっている金一封を暫らくながめていましたが、そのうち、

「そうだ、そうだ、お暇乞いの印にあいつの座敷へこれを抛り込んでやれ」

何か思案がついたと見えて、庭へ飛び下りて、その金一封を拾い取るや米友は覘いを定めて、それをお絹の座敷へ障子越しに投げ込みました。

その時に、お絹の座敷にはお絹がいませんでした。お松がひとりで机によりかかつて、本陣で貸してくれた本を読んでいた。

そこへ怖ろしい音がして、障子突き破つてちやうど自分の読んでいた絵本の上へ、重い物が落ちて来たからお松は吃驚しました。もう少しで自分の眉間へ当るところであつた。誰がこんな悪戯をしたのであらうと、お松は急いでその破れた障子をあけて見ました。

障子をあけて見ると、米友がいま丸くなって植込の中

を向うへ逃げて行く姿が見えましたから、お松は何のこ
とだかわけがわからずに、

「友さん、友さん、今ここへ石を投げたのはお前かえ」
と言って廊下を追いかけるようにしてみましたけれど、
米友は返事もしなければ、振返りもしないで、例の足ど
りで逃げて行ってしまいます。お松はいよいよ事情がわ
からないけれど、米友はすっかり旅の装いをして逃げ
て行くから、ともかくもつかまえて、様子を聞いてみな
ければならないと思いました。米友は気が短くて怒りっ
ぽいし、それに時々勘違いをして怒り出す癖があるから、
これも何か気に入らないことがあって逃げ出すのだろ
うと思ったから、呼び留めて事情を聞いた上で、理解し
てやりさえすれば直ぐに納まるものと、大急ぎで廊下を駈
けて有合せの草履をつっかけて米友を追いかけました。

表から逃げないで、裏の方の笹川へ沿うたところの細
い道を逃げて行く米友を、お松は追いかけるながら、

「友さん、どうしたのです、そう無暗に逃げてしまっ
ては事情がわからないじゃありませんか、少し待って下さ
い、事情を話して下さい、わたしたちを置いてけぼりに
して逃げてしまうのは酷いじゃありませんか、少し待っ
て下さいよ、ね、友さん」

お松がこう言って呼びかけた声の聞えないはずはあり
ませんのに、米友はあとをも振返らず、いよいよ一生懸
命で逃げて行きました。

「友さん、事情がわかりさえすれば、お前の出て行くの
を留めはしませんから、ちょっと待って話をして行って

下さい、ね、友さん、何が気に入らないの、わたしはこ
んなに疲れてしまった、これほどにしてお前を追いかけ
て来たのに、お前が聞かないふりをして行ってしまえば、
もし甲府へ着いた時に、君ちゃんの在所がわかってもお
前には知らせて上げないよ」

お松は駈けながら息を切って、こう言うと、この遠矢
が幾分か米友に利いたと見えて、米友は急に立ち止まり、
「お松さん、お松さん、俺らはこれからひとりで甲府へ
行くんだ、俺らがどういうわけでひとりで甲府へ行くよ
うになったのか、いま投げてやった包み物に聞いてみる
がいいや、お前さんには何も恨み恋はねえんだ、甲府へ
行ったらお目にかかりましょうよ」

米友は後ろを振返って、お松に向って大きな声で返事
をしました。

「そんなことを言わないで」

お松が押返して言うと、

「今まではお前さんたちと仲よくして来たけれど、これ
からは他人なんだ」

米友は頑として首を振ると共に、クルリと背を向けて
しまいました。米友はついに留まりませんでした。お松
は再び追いかける余力がないので、米友の姿が山の中へ
隠れてしまった時分に本陣へ帰って来ました。

お松はもとの座敷へ帰って来て、米友の言い残して行
った言葉、いま投げてやった包みに物を聞いてみるがい
いと言ったことを思い出したから、机の上に置いてあっ
たあの紙包を取って見ると、それは若干かの金の包みで

あります。

聡明なお松は、早くもそれと合点がてんをしました。お師匠様のお絹が、この金を米友に与えて暇を出してしまったものだろうと感づいたことであります。役に立っても立たなくても一緒にここまで来たものを、もう目的の地まで一息というところで暇を出すのは、人情に叶かなった仕打ちではないとお松は恥かしい思いをしました。お師匠様のお絹という人は、そのくらいのことをしかねない人。なるほど、神尾の殿様やその家来衆が迎えに来てくれてみれば、米友に附添を頼む必要はなくなってしまうたかも知れないけれど、ここでもう用はないからと言って金包を出されたら、大抵の人は気を悪くするに違いないと思います。

ましてやあの気の短い米友が怒り出して、この金包を叩きつけて逃げるということに、お松はかえって気の毒に堪えないのであります。

そこへ、お絹が見えたから、お松は米友が投げて行った金包を出して事情を話してみると、お絹は、

「それほど粗末になるお金なら返してもらいましょう、わたしに遣つかわせばいくらでも遣いみちがあるから」と言いって、恬てんとしてその金包を再び自分の手に納めた上に、

「ほんとに、素直すなおに出て行ってくれてよかった。何かの力になるかと思って頼んでみたら、力になるどころか、かえって世話ばかり焼かせてしまって、この後、どんな間違いを起すか知れたものではない、今のうちに出て行

ってくれたから助かったようなものさ」

お絹はこう言いって、その金を懷中へ入れてまた、神尾主膳の居間の方へと出て行きました。

それと同時にお松は、犇ひしとわが身に頼りなさの心が湧いて来るのを禁とどめることができません。